
F/A **フリーダム/アドベンチャー 第二話 ダイビング トゥ ザ アドベンチャー**

流都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F/A フリーダムノアドベンチャー 第二話 ダイビングトウザ アドベンチャー

【Nコード】

N5935H

【作者名】

流都

【あらすじ】

これは、若き冒険者達が失われた時代Lostと呼ばれている現代を、誰も見つけた事の無い何かを求めて駆け抜ける冒険活劇。ハンターリカルと共に冒険の旅に出た駆けだし冒険者のロックは、宝のありかを指し示すプレートを求めて海の守護者の住む島に向かう。その守護者から彼らはプレートを渡す条件としてある事を頼まれる。

何が起きても不思議じゃない！そんな世界を巡る、ネコヒトとライ

オンヒトの少年少女のアドベンチャーストーリーの第二弾！
今の生活と違う事をしてみたいと思う人、たくさんの冒険が待って
いる世界に飛び込んでみよう！

銀狼の観察者

その部屋はとても広く、その部屋は機械音と電子音が常に規則正しく鳴り響き、その部屋は光がはいってこないため真つ暗で、その部屋の中を照らしているのは、部屋の中に立っている水晶を使ったディスプレイで、そしてこの部屋に人は一人しかいなかった。

その人物は、水晶ディスプレイの前に置いてあるソファアーに深く腰を掛けたまま、心ここにあらずといった表情で、ただディスプレイから流れる映像に目を向けていた。

いつからこうしているのか、そもそもいつからここにいいのか。銀狼族の少年は考えるように瞳を強く閉じると、今より一層深くソファアーに座りこんだ。

かつて少年はハンターだった。彷徨う様に宇宙を飛んでは様々な惑星に降り立ち、数々の冒険や人々との出会いを楽しみ、それらを生きるための糧としていた。当ても無ければ目的も無い旅、それは彼が無限に等しい時間を持っていたためにそうだった、ある意味では当然の結果のためだった。

少年がここに立ち寄ったのは偶然であった。ここで彼は、この部屋に残っていた最後の人間から、この部屋と自分たちの残した研究成果を確認してほしいと託された。

以後、自分たちにこの場所を託した人間が息を引き取ってから長い長い時間、数えることも面倒なほどに長い時間、ここに留まっている。自分達が解放される条件が来るまで、その条件とは……。

その時周りの電子音より一段と高いシグナル音が鳴りだし、少年の思考を中断させた。目を開いた少年が音を出しているディスプレイを見て、その瞬間彼の眼に光が差し出した。すぐにソファアーから立ちあがると、水晶の前に置かれているコンパネのキーボードを操作する。モニターされている映像から一つずつ詳しいデータが来ることに、少年の顔は先程と違う、希望と期待のこもった表情になっ

ていく。

「やった、新しいハンターが見つかった」

「ずいぶん嬉しそうだけど、どうかしたの」

その時、デイスプレイを見ていた少年の後ろの闇から声が聞こえ、声の主が少年に近付いてきた。デイスプレイの光に照らされて闇の中からうつすらと姿を現した人物は、少年と変わらない年頃の、銀狼族の少女。白金色の髪を無造作に散らしている、自然な感じというより何もしていないショートヘヤーの髪型は、胸部付近までしか届いていないタンクトップにホットパンツ程の丈しかないジーンズ、申し訳程度の寒さ対策に着ているカーディアンといった服装のため、あまり手を加えなくても目立たない、むしろそれが一番似合う髪形になっていた。

露出が多い大胆な服装をしているが、それは少年の方も似たようなもので、白銀色のロングヘヤーの根元をバンダナで束ねた髪形に少女と同じ丈しかないタンクトップ、あちこちに穴のあいている年季の入ったローライズのジーンズ。そして同じような服装の中で全く同じなのが、二人が首に巻いているチョーカーのデザインだった。二人分の食事を乗せたトレイを持ってきた少女は、喜声をあげてデイスプレイを見ている少年に何があつたのかを尋ねる。彼は彼女を自分の隣に呼ぶと、デイスプレイ内の映像の一つを指さした。

「ほら、これ。キーの反応。これは三つ以上集まっているな。集めようとしている奴が出てきたの、何十年振りだろう」

喜びながら映像を見入っている少年。少女も嬉しさを表に出していたが、その一方では完全に喜んでいるようには見えなかった。

「これを集めている人達、今度も途中で駄目になったりしないかしら」

「それは何とも言えないな。でも、少なくともこれで、しばらくは退屈な日々を送らなくて済むぜ」

そう言っただけ少年は明るい態度で少女を見る。少女もその言葉の意味がわかったので軽く微笑むと、食事を運んでいたことを思い出し、

食事にしようと少年に声を掛けるとテーブルのあるソファアームまで歩いて行く。だがその時の少年は、少女を落ち込ませない様にカラ元気振舞っていただけで、実際のところは彼自身も不安に思っている所があった。

（ハンターがまた一人、大いなる遺産を求めて動き出す。こいつは最後まで来れるか、それとも途中で挫折するかくたばるか……）
ディスプレイを睨みながら考え事をしている少年に、早く席に着くよう少女が呼びかける。その声を聞いてやっと少年はコンピュータの前から離れて行った。

いくつもの映像と情報が表示されているモニター。その中の一つには、惑星トラメイの海上を移動している物の情報が映し出されていた。

1st ACTION 海の守護者

モルコーヌ星系の有人惑星は、それぞれ正式の名前のほかに、冒険者達が好んで使う俗称が存在する。『ワンピースケラウンド一欠けらの大地』や『一つの大陸の星』などと呼ばれる惑星トラメイは、惑星表面積の二割の陸地のほぼ全てが一つの大陸となっており、その広大な大地に存在するそれぞれの町は、全て陸路で回ることが出来る。

その一方で、残りの八割に当たる海洋部分には、小さな島や先史文明時代の建造物の使える部分を利用した、文字どおりの人口の大地しかなく、猫の額ほどの陸地を活かしてこの惑星の海で生活をしている種族も存在する。

今この海の上を一隻の宇宙船が飛んでいる。数日前、大陸の海沿いにある村から飛び立ったこの船には、旅の途中その村に立ち寄った獅子族のハンターの少女リカルと、その少女についてきて村から出てきたネコ族の冒険者の少年ロツクの二人が乗っている。

リカルはロツクの村に伝わっていた宝を譲ってもらおうと村を訪ねたが、宝を持っていた彼に見定めと称して勝負を持ちかけられた。結果的に勝負はつかなかったが、代わりにロツクは自分も一緒に旅に連れて行ってほしいと彼女に頼んだ。そうして冒険に憧れていて冒険者になるために修行をしてきた少年は、ついに念願の冒険者として少女の旅に同行し始めた。

その二人は今、次の目的地に向かうため船を進めながら、船内の食堂で朝食をとっていた。軽く焼いてからバターを少し塗ったトーストに、細かく刻んだハムを混ぜたスクランブルエッグ。そしてレタスとキュウリと豆を、手製のドレッシングで和えたサラダ。ロツクはこれらの料理を味わいながらも、手早く口に運びみるみるうちに食べていき、向かいに座っているリカルはロツクの食べっぷりを見ながら、食後のコーヒを飲んでいた。

やがて食事を食べ終わったロツクは、食器をまとめると席を立ち

洗い場の食器洗い機の中に入れ、再び席に戻ってきた。

「ごちそうさま、美味しかったよ」

「ありがとう。そう言ってもらえるとアタシも久しぶりに腕をふるった甲斐があったわね」

そう言うとりカルはポットの中に入っているコーヒーをカップに注ぐと、ロツクに差し出しながら話を続けた。

「一人のときって自分の分だけしか作らないから時々面倒になつてさ、なんか手抜き料理になっちゃうのよね。だから作ったものを美味しそうに食べてくれると、ホント気持ちがいいわね」

はにかみながら話すリカルに、ロツクはそう言ったものなのかと尋ねる。その言葉に、どんなに出来が良くても一人で食べる食事は楽しみが少ないし、自分の分しか作らない分栄養面などもいちいち考えて作るのも大変なので、結果簡単な料理で済ますことになるというリカルはロツクに説明した。

「なるほどな、オレはいつも家族の分を作っていたから、そういう自分の分だけって料理はしたこと無かったな。でもコーヒーの淹れ方は随分上手いんじゃないか」

「アタシの師匠がコーヒー党でね。だからいい豆の選び方や淹れ方とか、料理よりみっちり教えてきたから」

「そういう所にこだわる人って結構いるよな。……この濃い味もその人譲りか」

「そうそう、とにかく濃くて苦い味が好きだって言うから。アタシも自分で淹れた分もらって一緒に飲んでいたら味に慣れちゃったしね。……って、口に合わなかった？」

置かれたロツクのカップの中には半分ほど中身が残っていたためリカルが尋ねると、ロツクはバツの悪そうな顔で答えながらテーブルの上に置いてあるミルクのボトルに手を伸ばす。

「実は苦いものがちよつと苦手で。味はいいんだけど、濃すぎるからどうもな」

そう言いながらロツクはカップの中のコーヒーに、手に持ってい

るミルクを注ぐとスプーンで中身を混ぜてから飲みだした。そうして食後のコーヒーを飲み終えてから、ロツクは今後のことをリカルに尋ねてみた。

「とりあえずは船の運用に必要な人手の確保かしら。どこかの町で船員が冒険者を雇うか、それが各部署に自立型のプログラムを組んで完全な無人管理にするかでもするか」

「うーん、オレ達の旅の目的つてリカルがたてた物だろ、ついで来る奴なんてオレみたいなの好き以外いないんじゃない。第一雇う金なんかないだろ」

「じゃプログラム組んでコンピュータ任せにする？お金のほかに作る時間もかかるけど」

「素姓の分からない人間雇うよりは安全だからその方がいいだろうけど」

そこで言葉を区切ったロツクは、空のカップをテーブルに置くところりと食堂の中を見渡した。

「でかい船の中にオレ達二人だけつてのは、何かさびしいな」

元々ネコ族は騒がしいのは好みではないが、若いロツクは賑やかさというか、ある種の活気がないのがどうにも物足りない感じがしていたため落ち着かなかった。

そんなロツクを見ながら自分のカップとロツクのカップ、その他出ていたコーヒーマット一式を片づけているリカルは、とりあえずこの星から離れるまでに決める事にしようと言ってまとめると、支度をするために自分の部屋に戻って行った。今日は次の目的地である、トラメイの海の守護者が住む島に到着する。ロツクも席から立つと、準備のために食堂を後にした。

その後外に出る準備を終えた二人は、出入り口のハッチ前で合流した。ロツクはフリーサイズの灰色のシャツにいたる所に金属片や固めに加工した動物の皮をはりつけたジーンズ、その上からは金属繊維で編みである黒いハーフジャケットを羽織り、腰の辺りには頑丈なベルトのポーチを巻いている。このポーチのベルトは色々な物

が引つ掛けられるようになっており、彼が冒険で使うものがひとまとめになっている。

リカルの方も似たような感じで、暗赤色の金属繊維製のインナータイプのアーマーウェアとアーマースパッツ、その上に空色のアーマジヤケットとそろいのホットパンツに右手には防御用のアームガード、腰に巻いてあるホルダーには空気の弾を撃ち出す銃が入っており、後ろ側には戦闘用のナイフがふた振り入っている、どちらも身のこなしと機動力を重視した軽装備である。二人はハッチの前で外を見ていると、やがて目的地の島が見えてきた。

大きめの島とその周りに浮かんでいる二つの小さな島、その小さな島よりたくさんある太古の建造物の屋上部分、それらを橋でつなげて一つのコロニー状にしている島々。そこがトラメイの海を代々守って来た守護者の住む島、モビス島である。

「そう言えば」

ハッチのタラップ前でロックと並んで立っていたリカルは、思い出したかのようにロックに問いかけてくる。

「海の守護者さんってどんな人」

「いや、シャチ族の人でな、あの種族は血の気の多い人が多いんだけど、その人はまあ一言でいえば豪快な人だな。何かにつけてスケールがでかくて冗談が好きで、人情味もあつて話もわかる人だけど、時々変な事考え付いてはイタズラと言って人を実験台にするんだよな」

「……ひよつとして、あまりいい思い出無いの」

話をするうちにその表情がどんどん困った風になっていくロックを見て、思わずリカルは話の流れを切ると、彼はそのままの顔で彼女の方を向くと頭と耳をガシガシと搔いてから一言だけ話した。

「会えば分かるよ」

話をしているうちに船は海に着水した。外周の小島近くに船を停めた二人は、村を出てから数日ぶりに地面に足を着けた。

「ここがその島？なんだか随分とさびしいところね、人がいるの

かしら」

「……静かすぎる、どうしたんだ」

島に降りた二人の、ほぼ同じような感想。確かに島なので喧騒とは無縁の静かで落ち着いた所ではあるが、それでも自分の村より人口が多いこの島はかなりの活気があることを、何度か訪れているロツクは知っている。リカルも人の気配がまるで感じられない事を不審に思っている。音を拾おうとして落ち着きなく耳を動かしながら、島の異変の原因を考えようとしたロツク。だがそれより先にリカルが歩き出した。慌てて引き止めようとしたロツクだが、この場においても何も分らないと考えを改めると彼女について歩き出した。

そのまま島にかかっている橋を渡って本島に着いた時、辺りから突然殺気に似た、狂気的な感覚がわき出したのを二人は感じた。明らかに雰囲気が変わった空気に、耳とシッポを立てて警戒する二人その時力チャリと普通の人間には聞き取れないほどの小さな音を二人は耳に捉えた。次の瞬間別々の方向に二人がその場から飛び退くと同時に、彼らが立っていた地面に無数の銃弾が降って来た。

「ちよつとロツク、どうなってるのよこれ。全然歓迎されてないじゃない」

「いや、ひよつとしたら海賊や空賊と間違えられてるのかな」

銃撃が終わったところで、ロツクは隠れていた木の陰から少し顔を覗かせる。すると今度はロツクの隠れている木に向かって弾が撃ち込まれ、そのまま広い範囲に銃弾が浴びせられてきた。

「あはは、駄目だねこりゃ」

「笑い事じゃないでしょ。向こうの人たちと連絡とれないの」

「んん、……駄目だ、通信が繋がらない」

ロツクは頭にかぶっているインカムの周波数を変えて彼らと通信を試みるが繋がらない。どうすんのよと大声を張り上げるリカルをよそに、ロツクは腰のポーチから小さな鏡を取り出すと木越しにそれをかざして向こう側を覗く。リカルもロツクにならって鏡を取り出すと、同じように向こう側を確認する。やがて鏡を見ていたロツク

クがそれをしまつと、リカルに向かつて声を張り上げた。

「連中の、銃が置いてある所、分かるか」

「左右の高台、それぞれ大型の機銃ね。どうするの」

「とにかく潰して、それから一番大きな家が正面にあるだろ。あそこに目的の人がいるはずだから、とにかくそこまでいくぞ」

身振りを交えてリカルと打ち合わせを済ませると、ロツクは背中に背負っていたボードを取り出すと片足を乗せてエンジンを起動させる。リカルも腰から引き伸ばし型の、箒のようなスティックを取り出すと、片手に持ってエンジンライディングスマートを起動させる。

二人が出した物はRSと呼ばれるもので、Lost以前の文明に作られた粒子力学を応用した乗り物である。空間中の粒子を取り込み圧縮、反応させることで空間を高速で走行することが出来る。起動させたエンジンが空間の粒子をエネルギーとしてため込み始める。二人はいつでも飛びだせるように構え、それぞれ様子をうかがっている。

その時弾切れを起こして銃撃が一瞬弱まる。その瞬間、二人は弾ける様に壁から飛び出すと、ロツクは左腕に付けているAPR砲でリカルはスティックと反対の手に握っている空弾銃で、お互いの対角線上にいる敵二人の機銃を打ち抜くと、すぐにRSに飛び乗って一気に前に駆けだした。

前進している最中、不思議とほかの攻撃が二人に対して向かつてこなかったが、こちらが前に進んだところを見計らって一気に取り囲む作戦も考えられたので、急いで勝負をつけようとしたリカルはロツクに援護してと短く伝えると一人で先に走って行った。

「な、ちよつと待って」

慌ててリカルを追いかけようとするロツクだが、ロツクのボードよりもリカルのスティックの方が速度では優っている。そのためロツクは必死にリカルを追いかけるが、十秒ほどで彼女は小屋の窓から室内に飛び込んで行った。

それから少し遅れて小屋に入ったロツクの眼の前では、リカルが

初老の男性の首根っこをつかみ、さらにその周りを数人の男たちに囲まれている光景が広がっていた。床に目をやると数人の人物が倒れていたの、リカルが飛び込んだ時に一緒に倒したことは容易に想像できた。リカルに捕まっている男性は物音ひとつ出さず来ずにおり、取り囲んでいる男たちもリカルの力を見たためか一歩も動けずに睨みあい続けている

その状況を見ていたロツクは小さな溜息を一つ吐き出すと、おもむろに数回、両手を叩いた。ぱによ、ぱによと手のひらの肉球同士が発する肉質のある軽快な音が部屋中に響き、二人を含めた部屋の人間の視線を自分の方に向けさせた。

「はい、もういいだろ。みんな構えを解いてリラックスして」

「ロツク。ちょうどいい、どいつが守護者か知ってるんでしょ。ここにいるの」

今まで戦っていたためか鋭い目つきそのまま睨む様にロツクに視線を移すリカル。彼女の表情にロツクは少したじろぐが、彼女がつかんでいる人物に目を移すと静かにその人を指さした。

「お前が首根っこ引っ掴んでいる人が、海の守護者でこの村の長のチャンジャさんだ」

あきれ顔でロツクがリカルに守護者を紹介してから数秒後、ようやく理解したリカルは慌てて服をつかんでいた手を離すと、チャンジャは勢いよく床に叩きつけられた。慌てて介抱をする周りの村人達とリカル、それを見て思わず目頭を押さえるロツク。外には今まで隠れていたのか村人たちがちらほらと現れ始め、太陽も高いところまでのぼっていた。

「いやあ、やられたやられた。まさかあんな風に来られるたあ思わなかった、流石はハンター、冒険者と言ったところか」

豪快な笑い声とともに響く話声が部屋から外まで届き、ロツクとリカルはその声の主と向かい合わせで座っている。海の村の村長らしく海の男といった雰囲気が出ていて、白髪が多い頭髪は後ろでま

とめ、身体には年に似つかわぬ鎧の様な筋肉が服のそこから見え
ていた。先程は不意を突かれたためリカルに捕まってしまったが、
彼自身は歴戦を潜り抜け、今なお現役の戦士というイメージを持た
せていた。

「とつつあんも悪乗りしすぎだよ、村人全員隠してまでオレ達の
事試そうとするなんて」

チャンジャのイタズラには慣れているロックも、流石に今回は口
をとがらせて抗議をしてくる。チャンジャはガハハとまた豪快に笑
うと、ロック達にお茶を勧めながら話を続ける。

「お前が冒険者として村を出たって話を聞いたからにや、後見人
の一人としては試してやらないとな。しかし」

そこで一度言葉を切ると、チャンジャは出されたお茶を一息で飲
み干し、自分でお代わりを淹れているリカルに目を向ける。

「仲間と一緒に来ると聞いてはいたが、まさかこんな可愛い女の
子だとはな。で、何だ、その子はお前の嫁さんか」

「ぶっ、何言ってるんですか。彼女とはそんな関係じゃないです
よ」

飲んでいたお茶を軽く吹き出してから、ロックはチャンジャの言
葉を否定するが、彼はただ笑って言葉を続けた。

「何言ってるんだ、どうせいずれはそうなるんだろ。今からそう紹
介してもいいじゃねえか。なあ嬢ちゃん」

「もう、村長さまったらお上手なんですから。こいつとはまだ、
ただの恋人関係です」

「お前も黙れ。なんだそのぶりっこな口調は」

「しかしとにかくめでたいことだ。河を渡って行ったお前の両親
にも、いい報告が出来るってもんだろ」

そう言われたロックは、二人を一瞥しながらキセルを取り出すと、
レモングラスのハーブと乾燥させたオレンジの皮を混ぜた物を詰め
て吸いだした。これはスモークハーブと呼ばれる民間医療法で、使
い方さえ合っていれば子供も使っている、ごくポピュラーな方法で

ある。

ハーブを吸いながら、ロックはチャンジャに言われた事の意味を噛みしめていた。河という言葉には、物事を隔てるという意味の属性リーバという存在の意味も含まれている。そして先程言われた河を渡るとは、永遠の離別と言う意味が込められている。彼はロックの亡くなった両親に、ロックがそういう年頃になったという事が報告できる事がめでたいと言ってきたのだった。もちろんそれに気がつかないロックでもないの、彼の言葉に反論せずにだんまりを決め込んだ。ハーブを取り出したのはそれと気づかれなないようにするための格好である。

一方話を振って来たチャンジャはと言うと、話の波長が合うのかリカルと二人で話に花を咲かせていた。初対面のはずなのだが、どんな相手とでも一定以上の会話が出来る所が、ハンターとしてのリカルのすごさである。そのまま二人の会話をしばらく聞いていたが、チャンジャの話題は相変わらず自分と彼女の事に関することが多い。つた。

(しっかし、とつつぁんにしろレインさんにしろ、どうしてオッサンって連中は子供を冷やかしたりくつつけたがったりするんだろぅなあ)

村の子供たちの親代りをしてきたロックであったが、彼自身このような親心が分かるまでには至っておらず、しきりに自分の事を話題にするチャンジャを見ては首をひねっていた。そうこうしているうちに、話は旅の目的であるプレートトの事に移って行った。

「ふーん、つまりうちに伝わっているお宝をもらいたいって、そういうことかい嬢ちゃん」

「はいそうです。私の旅の目的を果たすためには、どうしてもそれが必要な物。出来ればゆずっていただきたいのですが」

「あんなもんでよけりゃかまわねえぞ。元々何に使うか分からんもんだつたからな」

思ったよりもあっさりと譲り受けれることになって拍子抜けした

が、それでも快く了解を得ることが出来たので、リカルとロツクは笑顔でお互いの顔を見合わせ、ロツクに至ってはリカルの手を掴んで喜んだ。

「ただ、やるのはいいんだけどなあ」

「ん、にやんだよとつあん、何か問題でもあるのか」

チャンジャの言葉に反応したロツクは、掴んでいたリカルの手を離して彼の方に身体を向け直した。一方リカルの方は、これ以上の空振りを掴まされたことが再三あったため、彼の言い淀んだ態度については特に身構えた反応は示さなかった。

「いやな、今それが手元にあればすぐくれてやってもいんだけど」

「やつぱりそうなりますか。まあそれならそれで私たちが取ってまいりますけど。それでプレートは今どこにありますか」

「ん、ああ、わしら守護者の一族に伝わる宝の中でも最も大事とされるものは、試練の洞窟と呼ばれる遺跡の中に収めてある。そのプレートは一番奥、守護者としての証をたてる部屋の中にあるんだが」

そう話しながら空になったそれぞれのコップにお茶を淹れていき、チャンジャは話の区切りの良いところで自分のコップの中身を少し飲む。そうして一息ついたところで彼がまた話始めるが、話を聞いていた二人は早く続きを聞きたがっていた。特にロツクは早くその先が聞きたくて仕方ないのか体を思いきり前に乗り出しており、それをリカルが押さえる形になっていた。チャンジャは二人の事を見て、いいコンビだなと楽しそうに眺めていた。

「その遺跡の扉は年に一度、決まった日にしか開かん。で、扉が開く日がこの間来てしまった。次に扉が開くのは来年だ」

「来年って、そんなに気長に待てないわよ」

チャンジャの言葉にすぐリカルがくらい付き、ロツクもそれに同意するように大きく頷く。チャンジャはもう一度コップの中身に口をつけてから、二人を制するように片手を挙げた。

「まあ話は最後まで聞きな。唯一例外として、守護者としての試

しを受ける者はその扉を開ける事が出来る。ちょうど試しをさせようとしてるやつがいるからお前さん達、そのプレートが欲しいんだつたらそいつについていけばいい」

「……だつたら初めからそう言つてよ全く、もったいぶりやがつて」

その言葉を吐き捨てるどふくれつ面になつて座り直すりカル。その変わり身の早さにロツクとチャンジヤは顔を見合せてから、それぞれ同時に呆れたというジェスチャーを取つた。

「まあ、とりあえずプレートが取り出せるならいいか。それどつつあん、誰についていけば遺跡の中に入れるの」

「お前も知つている奴。孫のコーラルだ」

「え、コーラルさんつてあのコーラルさん？あの人遺跡に入るの？こういうと何だけど想像できないや」

「一応あいつもこの家のもんだからな、今仕事で出ている航海から帰つてきたら遺跡に行かせるつもりだ。お前らそんな時についていけばいい」

そこまで話すとチャンジヤは席を立つて表に出て行つた。話を聞いたロツクの表情は驚きで変わつていたがそれだけではなく、ほんの少しうんざりとした部分も含まれていることを、横で見えていたリカルは見逃さなかつた

「ねえロツク、今出てきたコーラルつてどんな人」

チャンジヤを見送りながら小声で何かを呟いているロツクにリカルは質問をすると、彼は小さく唸つて即答を控えた。明らかにこの人物の話題を避けたがつていることは分かつたが、次の遺跡では一緒に行動することになるので、リカルとしては知らない訳にはいかなかつた。ロツクにしても黙つているわけにもいかない理由があつたので、しぶしぶながらも口を開いた。

「チャンジヤさんの孫の一人。優しい人柄で結構美形、だから人氣は高いんだけど、何というかナヨナヨした人でいまいち頼りがいが無いんだよな」

「つまり見たまんまのヘタレ野郎って事？」

「ぶつちやけそういう人。おまけに内向的な感じで、そのくせ意見だけはしっかり言ってくる」

「あー成程、無駄にネガティブな人ってわけね。アタシそういう人苦手だわ」

「やっぱりな。絶対リカルとはウマが合わないって思ったから、出来れば会わせたくないんだよな。頼むからいきなり殴り飛ばしたりしないでよ」

「はあ！？なによそれ。いくらアタシだって初対面の人に掴みかかるような事しないわよ」

彼女と初めて出会った時、知り合いの運び屋につかまっていたお礼参りとしてその人を殴り飛ばした所を見ていたロツクは、リカルがいきなり手を出さない様に釘をさしておく。それに対して彼女は自分が馬鹿にされたと捉え、声を荒げてロツクに答えるとコップの中に入っている残りのお茶を一息に飲み干しながら機嫌の悪さを表すように大きくシッポを振り、そのままロツクの背中を強く叩きだした。その勢いが強いいため、ロツクは自分の言ったことをリカルに謝る。彼が謝ってくれた事で少しは気分が晴れたが、それでもリカルは先程より弱くだがロツクの背中をシッポで叩き続けながら知らん顔を決め込んでいた。

「おうお前ら、ちょうど孫が帰って来たわ。おいらこれから出迎えに行くけど一緒に来るか」

少し居心地の悪くなつた部屋の中に、いいタイミングでチャンジヤが顔を出してきたので、ロツクは行きますと反射的に返事をする。と、コップの中身を一気に飲んでから席を立ち急いで外に出て行き、横でそのやり取りを見ていたりカルも、自分を一体何だと思っているんだとぐちをこぼしながらその後について外に出て行った。

2nd ACTION 『聞きしに勝るほどのヘタレだな』

家の外に出てきたロツク達が目にしたのは、島民たちが次々と島の南側にある大きな港に向かっていている光景だった。海から帰って来た人々を迎えに行く行列だと二人はチャンジャから説明を受け、その人の流れに後ろからついて行って二人も港に向かって歩いた。人込みが苦手な、ネコ科の二人の習性のせいである。

港は水没している建物の中でひときわ大きい物の周囲に防波堤や接舷施設を備え付け、周りの橋より頑丈な作りの橋で本島とつないでいる。漁業や海上交易を主な生活の基盤にしている以上、港湾施設の充実は当然のことであり、本島にある居住区と比較しても力の入れようは明らかだった。

その港に停泊している船を、ロツク達は橋の中ほどから遠巻きに眺めていた。人込みに入りたくないというのもあるが、二人が港に着いた時には足の踏み場も無い位に人で埋め尽くされていたため入るに入れなかつたからだ。次々と船から降りてくる人達を見ながら、ロツクは目的の人物であるコーラルの姿を探す。リカルは探す相手の顔を知らないためロツクの横で座り込んで、コーラルを探すロツクの横顔を見上げる様に見つめていた。

ややあつてから見つけたとロツクが声を上げ、隣で座っていたリカルに立ちあがるように促した。

「何人かいるけど、一体どの人」

「今階段で下に降りようとしている人、分かる？」

そう言われてリカルが目を向けた先には、オールバックにサングラスの船乗りに見えない格好をした年配の男性と、その一歩後ろについて歩いてくる優男風の青年が、階段から地面に降りようとしていた。

「サングラス掛けている人があの船の船長で、チャンジャさんの子供でコーラルさんの父親。その後ろにいる人がコーラルさんだ」

「ふーん、あの人がコーラルさん。美形で身体の線が細くて、まあ確かに女ならだれでも惚れそうない男ね」

「……そんなもんか。とにかく会いに行こうぜ。ところでリカル、コーラルさんの事どう思う」

「一般的には悪くない方だけど、アタシの好みじゃないわね。でもなんでそんなこと聞くの」

ロツクの問いに答えたりリカルはそのままロツクに質問を返す。しかし彼はその質問に答える事無く前に歩き出す。妙な違和感を感じたりリカルが、不機嫌そうにシツポを振っているロツクとコーラルを見比べた後、不意にリカルは大声でロツクに声をかけた。

「ひよっとしてやきもち？やきもちか。妬いてくれてるんだ」

突然のリカルの声にロツクは足を止めて顔だけ振り返ると、一瞬リカルを見た後プイと顔を背けて再び歩き出す。それを見てリカルはパタパタと小走りで彼に近づくと、そのまま後ろから彼の背中に飛びついた。

「うわにゃ！ニヤンだよいきなり」

「へっへー、ロツクのくせにカワイイ事してくれるじゃない。そんな所も好きだぞ」

「いいから離れるよ、苦しいし恥ずかしいし。ああもうそんなにくつつくな」

「うはは、そんな事で素直に言う事を聞くアタシじゃないわよ」

「おめえら顔も出さずにご行っただかと思っただら、昼間っから往來でいちやついてんじゃねえよ」

のどをゴロゴロ鳴らしながら抱きついてきているリカルを背中からほどこうとロツクは必死になるが、しっかりとしがみついている彼女は全く動かない。そうやってもがいている所に、チャンジャが船から降りてきたコーラル達を連れて、橋の上に立っていたロツク達の所までやってきていた。

「……したくてしていた訳では無いですからね」

バツが悪い事を自覚したロツクがとりあえずそれだけ言うと、言

い訳にしか聞こえなかったのか全員が生温かい目でロック達の事を見ていた。慌ててほかの事を言おうとしたが、その場の空気に押されてあきらめたロックは、彼らの後についてチャンジャの家に向かっていた。

「申し訳ないですが、お断りさせていただきませんか」

チャンジャの家でリカルは、先程チャンジャにした話と、その時彼から提案された事をコーラルに話したが、彼はその事を拒否してきた。なぜかと理由を聞いてきたリカルにコーラルはゆっくりと答え出したが、それは話を持ちかけた二人よりも周りの人々の方を驚かせた。

「元々私にはこの島の長になるつもりがない。それに今まで何度か遺跡に挑戦してきましたけど、私にはあの遺跡は攻略出来そうにない。私はもう、遺跡に入るつもりはありませんから」

「入るつもりはないと言って、お前も次の長候補の一人。試練を受けなくてどうする」

「島の長や守護者なら他の親戚たちがなればいいでしょ、私よりもふさわしい人はたくさんいるんだし。大体父さんが爺さんの長男だからって、私とその跡を継ぐ道理はないでしょ」

「コーラル兄さん頼むよ。いやなら扉を開けてくれるだけでいいからさ」

「君達が欲しがっているプレートまで私がつどり着けない。だから私は……」

「あーっ、もういい。もういいわよ」

ロック達の願いを断るコーラルと、渋るコーラルを説得しようとする人達の言い争いを止めたのは、リカルの怒鳴り声だった。その場の一同はその声で話をやめると、そのままリカルに視線を集めた。

「話に聞いていたほどまでの事は無いだろうと思っていただけ、聞きしに勝るほどのヘタレだな。そんなに嫌ならこっちだってもう頼まないわ。アタシ達はアタシ達で扉を開ける方法を考えますから、

失礼します」

「リカル、ちょっと待てよ。すいません失礼します」

リカルとロツクがその場から出ていくと、部屋に残っている人達はみなコーラルに目を向けた。

「コーラルよう、年下の嬢ちゃんにあそこまで言われて、それでもまだ行かないなんてしょぼい事言う気か」

「コーラル、俺はお前をそんな風に育てたつもりは無いんだがな」
自分の父親と祖父の言葉を、コーラルはうつむいたまま聞いていた。

「大体昔からの知り合いがああやって頭下げてお前に頼みに来たのに、それを断るなんて冷たいやつだね」

チャンジャの言及を聞いた時、それまでうつむいていたコーラルはゆっくりと顔を上げてチャンジャの顔を見た。

一方ロツクは先に出て行ったりリカルを追いかけて外に出て、ほどなく炉端焼きの屋台で魚の串焼きを食べている彼女を見つけた。

「リカル、また勢いで物言ったな。あの人たちの協力も無しにどうやって遺跡の中に入るんだ」

彼女の隣に座って店員に注文をしたロツクは、腕組みをしながら横目でリカルの方を見る。リカルは食べ終えた魚の串を皿に戻し焼き貝の串を手にして一口ほおぼると、予想していた事だといった感じでロツクの方を見た。

「別に考えなしに言ったわけじゃないわよ。年に一度だけしか開かない扉って事はタイマーで開閉してるんだろうし、特定の間しか開けられない扉なら何らかの認証システムを使ってるわけでしょ。だったら扉のキーをハッキングして開けちゃえばイッパツよ」

「一発ってお前。いくら何でも人様が管理している土地の物を勝手に壊すような真似しちゃダメだろ」

「人から協力取れないんだったら、せめてその位の許可は取れるでしょ。それとも何かいい手があるの」

焼き貝を全て食べその串を皿に戻したりリカルは、自分の考えに否

定期的なロツクに代わりの意見を求めた。代案を振られたロツクは小さく唸りながら、やって来た小魚のフライを丸ごと食べた。何個目かの魚を口の中に放り込んでから、ロツクはとりあえず口を開いた。

「開くまで待つわけにもいかないし、いつそコーラル兄さんを連れてくかなあ、無理やり。とつつあん達は多分何も言わないだろうから」

「うーん。他に手が無いなら、いつそそれで行く？」

「拉致まがいただけ。ま、これ以上考えるのも面倒だし、首根っこ引つ掴んででも連れてくか」

最後の魚を食べ終えてから、ロツクはポーチの中から屋外作業用のワイヤーロープ束ねたケースを取り出す。これで彼を縛り取ろうとロツクは考え、リカルもそれに同意、そうして二人はコーラルを捕まえに行こうと席を立つ。しかし歩き出そうとした二人は、突然目の前に現れた人影に道を遮られた。

「あれ、コーラル兄さんととつつあん。見送りにでも来たの」

「何にしても好都合ね。ロツクそっち持って、すいません、ちょっと動かないで下さいね」

「おうロツク喜べ。孫がおめえらについてくってよ。て、なーにやってんだ」

「にや？本当ですか兄さん」

チャンジャの言葉にロツクは思わずコーラルの眼前まで顔を寄せて尋ねる。彼は近すぎるロツクから顔を背けると、そのままいくつか頷きながらロツクの質問に答えていった。

「う、うん。どこまでやれるかは分からないけど、とにかくもう一度行ってみようと思って。所で二人で何をしているの」

「あなたの身柄を押さえるために縛らせてもらってます」

チャンジャとコーラルの疑問に答えながらコーラルの両手首を縛っていくリカル。ロツクもコーラルの身体にロープを巻きつけていたが、本人についてくる意思があると分かると、巻いていたロープ

を離してすぐに彼の呪縛を解いていった。

「私ってそんなに頼りにならないのですかね」

「まあ、いい大人が駄々こねてりゃ信用も無くなるわな」

縛られていたコーラルが悲しそうにポツリと一言こぼしたのは、細めのワイヤーロープと格闘しながら、なんでこんなに強く縛った、なんで変な巻き方したのかと言い争っているロックとリカルが何とかそれを解いていっている最中のことだった。

3rd ACTION 『約束は果たさない』

「お、なかなかいい装備じゃない。結構それっぽく見えるわよ」
着替えて出てきたコーラルの姿を見たりカルの第一声がそれだった。

ロツク達に同行することにしたコーラルはその事をロツク達二人に告げると、装備を取りに一旦家に戻り再び二人の前に姿を現した。彼の服装は、大型の魚類のうるこを重ね編んで作られたインナースーツの上に、藍色の染料で染め抜いた陣羽織コンバットアーマーというこの島伝統の戦闘服で、さらにその上から薄紫色のCAコンバットアーマーを装着していた。

CAとは生身で高速機動戦闘が行えるように開発されたLost以前のメカニカルアーマーで、人間がガーディアンやRUと対等に戦うために用いられている。コーラルのアーマーは胸部と腰部を本体とし、それに各種オプションとなるパーツを装着するシンプルな物で、彼は手首と足首、肘と膝にパーツをつけ防御力と機動力を重視したタイプとしてある。

「馬子にも衣装って言うけど、それなりに冒険者っぽいねー」

「へー、ティンパルタイプのCAか。拡張パーツで性能を変えられるのが特徴だよ、高かったっしょ」

「ううん、のみの市で買った中古品。だから性能もそれなりなんだよね。パーツも探索用のヘッドイヤールと飛行用のバーニアしかなくって」

「それでもCA扱えるなら一端の冒険者でしょ。アタシも大きな探索の時にはアーマーを使うからね。このアーマーがまた自分で作ったものでね……」

コーラルのアーマーの話からリカルのアーマーの話に話題が移りそうになった時、チャンジャが二人のシャチ族の男女を連れて三人の所にやって来た。

「講釈してる所で悪いがよ、出発の準備はできたか。出来たなら

こつちの連中と顔合わせさせときてえんだがな」

「んー、そちらの人達どういう人達？」

「おう、ミリ とジヤナン。手伝いと言つか、雑用係とでも思っ
てくれや」

紹介を受けて女性と男性、ミリ とジヤナンは二人に対してそれ
ぞれ軽く会釈を交わした。

「要するにお目付け役ね。まあ自分の孫を預けるんならその位し
たくなるわね」

「爺さん、わざわざ人を増やさなくてもいいのに。大体そんな事
をしたらついてきてくれるロック達に悪いよ」

「え、何か勘違いしてない。オレは別に何も手伝わないぞ」

リカルとチャンジヤの会話に入って、コーラルはそこまでしなく
ていいと意見を述べたが、自分に手を貸さないとこのロックの言葉
を聞いた時彼は驚いた風にロックを見て、その理由をたずねてみた。

「だって元々コーラル兄さんの受ける試練だろ。よっぽどの時な
らともかく、初めからオレは手を貸すつもりはなかったから」

「そりゃ確かに道理よね。でも便乗するんだったら少しぐらい手
間賃代りに働いてもいいんじゃない」

「いや、おいらはやるとは言ったがどうにかしろとは言ってねえ
から、お前らがやりてえ様にすりゃいいさ」

揉めそうに思われた話し合いだったが、チャンジヤのその一言で
この件についての話はついた。コーラルはまだ少し納得のできない
所があつたが、ロックの言葉も正しいので言い返す事も出来ず、結
局のところはロック達には彼らのしたい様にさせる事にした。

「心配しないの。いざとなったらちゃんと助けに入りますから」

「そうそう、いくら何でもケガさせたら元も子もニヤいから、そ
こら辺は当てにして下さい。さて準備出来たら行きましようか」

そう言いながらロックは着ていたジャケットを脱ぐと、裏地を表
にして改めて袖を通した。彼の黒いジャケットの裏地は炎を連想さ
せるほどの赤色で、普段遺跡の探索に潜る時や戦闘を行うときには

隠密性に優れた黒色を使う事が多いが、多人数での探索や明るい場所での行動時は目立つようにこちらの赤色を使う。着替えを済ませたロツクは、これから危険な所に行くにも関わらずに無邪気な顔で笑うと、そこにいる人達に向かって音頭を取った。

「おーし、それじゃ遺跡に向かってしゅっぱーつ。ところで遺跡はここから遠いのですか」

「いいえ、すぐ底ですわ」

ロツクの質問に答えたミリは、そう言うと今立っている島の地面を指さした。

「遺跡はこの島の内部だ。そもそもこの島は遺跡の上に人が住めるように改造を行った人造島なんだ」

彼女の言葉に合わせてジャンンも口を開く。それを聞いた時、頭にある疑問がよぎったりカルはすかさず彼らに質問をした。

「この島の下に遺跡があるなら、そこまでどう行くの？まさか潜っていくわけじゃないよね」

「ああ、確かに潜ってもいけますけど……」

「あちゃあ、やっぱり。海を潜っていくななんてアタシできないわよ」

「オレだって出来ねえよ。どうすつか」

「あの、ロツク？別にそんなことしなくても……」

いきなりの話でどうしたらよいか話をしているロツクとリカルは、何かを言おうとしているコーラルをそっちのけで二人で相談を始め、もはや同行者の事などすっかり忘れていた。

「あ、そうだ、宇宙服。この間直した宇宙服使えば深海まで潜っていけるんじゃない」

「宇宙服？これの事か」

そう言うとロツクは腰の左側に付けている小さな長方形型の機械を手でポンとはいた。リカルも軽く頷くと、自分の右の腰に付けている機械のスイッチを入れる。始動した機械は小さく唸りだし、それと同時に二人の姿がわずかにだかぼやけだした。

これもLost以前の先史文明から伝わって来たもので、空気の微粒子を身体中にまとわせる事で酸素の無い場所での活動を行う事が出来る機械で、普通の機密服と違って全く重さを持たないためとても扱いやすく重宝されている宇宙服である。

粒子の宇宙服を纏った二人は、そのまま海辺に走っていくと、海に向かって飛び込んで行った。ザブンと大きな音とともに水柱が二つ上がり、その後ろからコーラルたちが二人の飛び込んで行った水面を見つめていた。

「全く、私たちを置いて先に行くなんて何考えているのかしら」

「待てと言ったのにガン無視しやがって、若、いかがいたします」
ジャンンに問われて、何とも言えないといった顔で水面を見ていたコーラルは、付き人の二人の顔をみて口を開いた。

「彼らと合流しないとどうにもならないし、私たちも入り口に向かおう。とりあえず約束は果たさないと」

そう言うところコーラルは島の内側に向かって歩き出し、付き人達もそれについて歩いて行った。

飛び込んだ海の中は、上から二つの太陽の光が差し込み、澄んだ水の深い青色が広がっており、様々な海洋生物が群れを作って泳いでいた。その幻想的な景色に思わずロツクは見とれていたが、頭に装備しているインカムからリカルの声が聞こえた事で我に返った。かなり深く潜った所で宇宙服の事を思い出して確認をしてみるが機械は正常に作動していた。リカルの方を確認すると、彼女の方も大丈夫だとジェスチャーで合図を送って来たので、二人はさらに深く潜っていった。

潜り続けてしばらく行くと、島の土台となる部分にぽっかりと穴のあいている所が見えた。そこから入ってしばらく行くと水面が見えてきた。先に水面から顔を出したりカルは、外の空間に酸素がある事を確認するとすかさず海から出てきて宇宙服の機能を切る。すぐ後に上がって来たロツクに手を貸すと、ロツクも彼女と同じように宇宙服を外した。

次の瞬間複数の人の気配を感じた二人はすかさず気配のした方向に身体を向けた。そこにはコーラル達三人が遺跡の扉の前に立って、ロック達の方を見ていた。

「あれ、コーラル兄さんいつの間に、どうやって来たの」

「ろくに話を聞かないで先に行くからだよ。この島は人工島だから、上の方から降りてくる事が出来るんだよ」

そう言いながらコーラルは一方を指差し、その方向を見ると上の方に伸びている階段が二人の目に入った。それを見た二人は声にならないといった感じで、お互いの事をジト目でにらみ合い、コーラルが二人をなだめるのに更に時間を費やすことになった。

4 t h A C T I O N 第一の試練

扉が重い音を上げながら、真中を境にゆっくりと左右に開いていく。扉の先には薄暗い空間がぼつかりと口を開けている。生体認証システムに置いていた手を離れたコーラルは後ろで見ていた人達を見て力強く頷いた。

「これが入り口。あなた達の探しているプレートは一番奥の祭器の保管庫にあるはずです」

「何だか簡単に開いたわねー。これだったらやっぱりアタシ達だけでも充分じゃなかったの」

「だから人の土地の物を壊すような事しちゃダメだったの」

「それにそんなに簡単には行かないわよ。この遺跡の中の扉は全部この扉と同じ仕掛けで、コーラル様達特定の人達で無ければ自由に開ける事は出来ないのですから」

無理やり開けていたら時間がかかると、リカルを一瞥しながらミリーは言葉をまとめた。扉が完全に開いた事を確認してから、一行はコーラルを先頭にして遺跡の中に入って行った。

土や岩で作られていた人工島の外見と違い、遺跡の中の通路は一面金属で覆われていた。遺跡によくつかわれているこの金属は、腐食しにくく使用耐久も高いという事が、冒険者達が持ち帰った物を研究されて判明したが、どのような物質を精製する事でこれが作られるのかは今も研究中である。

真つ暗な通路を、コーラル達三人は肩に付けた小型のライトで、ロックとリカルはインカムメットに取り付けてある更に小さいライトを使って先を照らしながら進んでいく。先頭を歩くコーラルは正面を見据えてわき目も振らずにただ真つ直ぐと歩いていく。緊張している事がその後ろ姿から漂っていて、明らかに力みすぎている事がよくわかる。そのすぐ後ろを歩いているロックは、あっちこつちとせわしなく遺跡の中を見て回っており、コーラルとはまるで対照

的な態度だった。頭に装備しているインカムにライトがついているため、ロツクが顔を向けると光もせわしなく遺跡の中を駆け回り、ロツク以外の人達の目にその光景がいやでも入ってくる。

「ちよつとロツク、やたらといろんな所に光が当たってうつとおしい。前だけ見ていてくれない」

「あー、ゴメン。それ無理」

ロツクの行動が邪魔に感じてきたリカルが、ロツクに対して一言いうが、ロツクは短く答えると取り合おうともせず、周りを見続けている。

「子供じゃないんだから、もうちよつとどっしり構えて落ち着きなさいよ」

「そこまで大人じゃないし、こんなすごい物落ち着いて見るなんて出来ねえよ」

今度は少し声のトーンを落として話してみたが、ロツクはその言葉をかわして自分のやりたいようにしている。

「ホント、馬鹿なんだから」

「なに言ってるんだ。冒険者ってそういう生き物だろ」

「ん、ちよつと今のは聞き捨てならないわよ」

ロツクの奔放ぶりを見たりカルは、つい小さく本音を漏らす、それを耳ざとく聞いていたロツクは、笑いながら彼女に返事をした。しかしその言葉を聞いたリカルは、ムツと表情を曇らせるとロツクの襟首を掴んで自分のそばに引き寄せた。ロツクは何がどうなっているか分からないといった様に彼女の顔を覗き込んだ。

「ぐえ、ニヤンだよ、オレ何か変な事言ったか」

「あのね、冒険者が全部アンタが言ったみたいな連中ばっかだつたら、職業として成り立たないでしょ。大体そんなんじゃない他の連中が救われないわよ」

「いや、そんなこと言っても冒険なんて元々商売でやるもんじゃないだろ。好きにする事が出来なくちゃ面白くないじゃん」

(……遺跡の中でよくあんな喧嘩が出来るな。しかも話が飛躍し

てやがる。ホント冒険者って訳がわかんね)

ムキになりながら言葉を浴びせてくるリカルと、その言葉をのりくらりと受け流すロツクのかげあいを、ジャンンは内心あきれながらも、無表情でみていた。他の二人も前を見ながらだが聞こえてくる会話を耳にしては、コーラルはこんな所でよく喧嘩が出来るなと変な感心をしており、ミリーはそのやり取りを聞いて思わず笑いそうになっている所を我慢していた。

それぞれ言い合っていた二人だが、不意に耳をピンと立てると、一瞬で体をひるがえし通路の先の方にじっと目を凝らした。二人の突然の変わりように戸惑う三人。彼らを見無視して話をする二人。

「いるねこの先、かなりの数のガーディアン」

「仕掛けの解除とか、知恵試してみたいなもんかと思ってたけど、いきなり戦闘から入りますか」

この二人の会話を聞いていた三人のうち、一番早く我に返ったコーラルは一人小さく声を上げた。

「この先が第一の試練の大部屋です。ここは何とか超える事は出来たのですが……」

「大部屋か。道理でガーディアンの足音がたくさん聞こえてくるわけだ」

「十か二十か、それ以上？とにかく簡単にはいかないって事だけは確かね」

全員が示し合わせたように頷きあうと、彼らは通路を一直線に走りだし、大部屋の手前の角の所までやって来た。コーラル達三人は角の壁から、ロツクとリカルは大部屋に入る道を越えてコーラル達と反対側の壁から大部屋の中の様子を伺った。部屋の中には銃と剣を持ったガーディアンが複数歩いており、さらに闇の深い所には目に見えないが別の装備をしたガーディアンが歩いているのが見えた。

部屋の中を伺ったジャンンは、自分達より先にガーディアンの存在に気づき、更にその先の状況の推論も行った二人を見ると、いまいち頼り無い年下という、自分の持っていたイメージを変えざるを

えない事を思い知らされた。

「結構いるわね。ねえ、ここはどうすればいいの」

ロツクの頭の上に顎をのせながら、リカルは道を挟んだ隣のコーラルに試練の内容を聞く。ロツクも話を聞こうと自分の耳を立てるが、耳にかかるリカルの吐息を意識してしまい、なかなか集中することが出来なかった。

「ここでは鍵を見つけて扉を開ければ攻略です。一度攻略すればこの部屋のガーディアンは、この遺跡を出るまで機能を停止します」
コーラルからの説明を聞いたリカルは、ふうんと小さく唸るとまた部屋の中を見る事に集中した。その時、頭にびったりとくつついて動かないリカルに我慢の限界を感じたロツクは、思い切つてリカルに声をかけた。

「ちよつとりカル、頭が重いからどいてくれないか。耳元で喋られるのもうるさいし」

「ん、別にそんな大声で話しているつもりはないけど」

「そうくつつかれると気になってしょうがねえんだよ。とにかくどいてくれ」

「ふーん。そんな風に言われると、素直にどいてあげたく無くなるな」

そう言つとりカルは、ロツクの頭にのしかかるように体重をかけると、彼の耳に息を吹きかけた。突然の不意打ちを受けたロツクは小さく身震いをして、思わず声が出そうになった口に手を当てて声を上げるのを防いだ。

「何しやがる、見つかったらどうするつもりだ」

小声でロツクはリカルに怒鳴りつけたが、彼女は全く意にも介さずにいる。

「おいお前ら、ふざけてんじゃねえぞ」

「全く、ついてくるなら少しは働いてほしいものね」

その二人のやり取りに、流石に力チンときたジャンとミリーは口々に文句を言ってくる。元からあまり手伝わない事を伝えていた

ロツクは特に気にも留めなかったが、リカルはその言葉を聞くと少しの間考え込む。と、何かを考えたついたりリカルは、ロツクの耳元で彼の名前を小さく囁くように呼ぶ。くすぐったい声で呼ばれた彼がなにと少しいらついた声で聞き返すと、リカルはロツクの耳の根元に顔を近づけ、彼の耳たぶを甘がみして、さらに舌で舐め上げた。

「ふひゃああ！」

今まで耳に感じた事のない刺激を受けて、ロツクは思わずシッポの毛を大きく逆立てながら悲鳴を上げてしまう。その声に反応して、大部屋の中のガーディアンが一齐にロツク達の方を見てきた。

「いきなりなんて事しやがるんだ、このバカ女」

「そんな事より来るよガーディアンが」

「あらら、こうなった責任はとらないとね、ロツク」

リカルの言葉を聞いたロツクは、彼女の思い通りにしてやられた事に気がつくのと、畜生と小さく呟いてから、腰の後ろにくくりつけていた杖を取り出すと、手で引き延ばして両手で構えた。

「ガーディアンは全部引き受けてやるから、コーラル兄さんは扉をお願いします。リカル、お前も手伝え」

ロツクの声に了解と答えたりカルは、右手に魔力を付加したコンバットナイフを持ち、左手には圧縮した空気の弾を打ち出す空弾銃を装備して、すでに戦闘態勢を取っていた。

それを見たロツクは軽く頷くと、彼女と共に隠れていた壁から飛び出し、ガーディアンの群れに飛び込んで行った。

大部屋から通路に向かって多数のガーディアンが移動してきて道をふさいでいる。それらの群れにリカルは空弾銃を撃ち込んで一体倒していき、ロツクは杖をしっかりと握りしめると早口で魔法の呪文を紡いでいく。リカルが銃弾を撃ち尽くしたところでロツクが前に出ると、杖を目の前に突き出しその力を解放する。

「なぎ払え、プロントサンダー」

構えた杖の先から何本もの稲妻がはしりガーディアンに向かっていく。それがガーディアンに突き刺さると、彼らの金属の体は粉々

に碎け爆発。さらに後ろに控えていた他のガーディアン達をその爆風が通路から吹き飛ばし、大部屋の中に押し戻した。

倒れたガーディアンにとどめを与えながら、二人は部屋の中に飛び込んでいく。すると同時に壁の影から剣を構えたガーディアンが数体、二人に向かって飛び込んでくる。大ぶりに剣を振りかざしてその切っ先を二人に叩きつける。しかしその動きに気づいていた二人は剣が振り下ろされる前に上に飛び上がり彼らの攻撃をかわした。攻撃をかわされ、地面に空振りをした彼らが体勢を立て直す前にリカルは空弾銃で、ロックは左腕に付けている手甲型の携行型電磁弾砲、アームトランスミッターAPRで彼らを打ち抜いた。頭上から銃弾を浴びせられ完全に機能を停止した彼らの上に着地した二人は、すぐに体勢を整えたとそれぞれ別のガーディアンの群れの中に飛び込んで行った。

襲いかかるガーディアン達を、リカルは相手の間合いより早く懐に飛び込んで、ナイフと銃を使って一体一体確実に倒していく。一方ロックはAPRと魔法を使い距離を取りながら戦い、近づいてきたガーディアンは杖と体術で動きを止めてからAPRで倒していった。

その二人に少し遅れて部屋の中に入ったコーラル達は、その光景を見てただ驚いていた。

「すげえ、あの数に一人ずつであたってもどっちも引けをとっていない。やはり冒険者ってのは伊達じゃ無い様だな」

「何にしる今のうちです。コーラル様、早く鍵を探しに行きましょう」

ジャンンとミリーに促されたコーラルが走りだそうとした時、別の場所から三体のガーディアンが走り込んできた。それに気がついたジャンンはコーラルの前に、ミリーはその隣に立った。近づいてくるガーディアンに正面から近づいたジャンンは、右手に持っている電磁アックスを力任せに横なぎにしてガーディアンの一体を粉碎。ミリーは大型のレーザーソードで頭から真っ二つに切り裂き、コーラルは打撃戦用に作られた、ロックの物とは違う種類の杖を両手に

持った。杖に力を込めると杖の先に薄青の光が集まりだす。そして杖の先が光で包まれたのを確認してから杖を構えると、彼は下から杖を振り上げてガーディアンの体を高く打ち上げ飛ばした。

「よし、これ以上あの二人に負担を掛けたくない。早く探しに行こう」

そう言うところからコーラル達は壁際の坂道から上に登り、鍵を目指して走り出した。その光景を目の端に捉えたロック達も、足止めに専念するために気合を入れ直してガーディアンの群れを睨みつける。その時天井付近から、ガンと甲高い音が響いた。一瞬の事だがその音を聞き取った二人が上を見上げると、何かの塊が空から降ってきて、地面にガシヤンと叩きつけられた。

「な、何だあ」

いきなりの闖入者に驚いたロックがそれに目をやる。それは先程コーラルが天高く打ち上げ、その時に壊れたガーディアンの残骸だった。目の前のガーディアン達と戦っていたロックはそんな事を知る訳がなく、どうしてこんなものが空から降って来たのか訳が分からなかった。

「ロック！」

リカルが発した鋭い一声に我に振り返り前を見ると、自分の一瞬の隙を見抜いたガーディアン達が大学してロックに襲いかかって来た。慌てて構え直すロックの耳に、ヒュルルルと何かが高いところから落ちてくるような風を切る音が聞こえてきた。前に気を配りながらすぐ上を見たロックは、次の瞬間顔を青くしてすぐにリカルにそこから離れる様に怒鳴り、自分もその場から後ろに下がった。

ガシヤーン！！

一瞬の間を置いてから、天井から降って来たものは、ガーディアン達の真上に落下。彼らの大半はよける事も出来ずに直撃を受け、見るも無残に壊された。

「ちよ、今度は何よ。……って、うそでしょ」

上から降って来たものを見たりカルは、それを見て啞然とした。

それは部屋の上空に渡されていた橋の部分の通路だった。高く打ち上げられたガーディアンがぶつかった時、当たり所が悪かったようで、通路の一部が崩れて落下してきた。ロックの気づくのがもう少し遅かったら、二人があのがレキの下敷きになっていただろう。

その光景を上から見ていたコーラル達は、下で固まっている二人を見ながら走っていた。

「あれはやっぱりさっきのアレのせいかな」

「アレ以外何があるってんですか。若がガーディアンを打ち上げたりなんかしなきゃこんなことにもならなかったでしょうに」

「いやだって、あのときはあの方法が倒しやすかったからさ」

「とにかく。これ以上厄介なことになる前にこの試練を攻略しましょう」

会話をしながらも道を阻むガーディアン達を倒しながら進む三人。コーラルは心の中で二人に謝りながら先陣を切って走り、後の二人もそれに続いて道を駆け、そうして一行は、部屋の一番上の方までたどり着いた。

吹き抜けになっているフロアーには、たくさんの通路が網の目状に走っておりクモの巣を連想させる。そしてその通路にはいくつかの箱が置いてある。鍵はその箱のどれかに入っている。三人はそれぞれの通路に散らばると、そのまま一気に箱を開けていった。

一方、数が減ったとはいえいまだ健在のガーディアン達と睨みあいをしているロック達。ガレキの山を乗り越えてきた所を攻撃するため二人はそれぞれ銃を構えて集中している。ところがガレキの上に立ったガーディアンは、急にその場で立ち止まると上を向いて何かを探す様に見た。そしてその行動は他のガーディアン達にも伝わり、あつという間に全てのガーディアン達がその場に立って上を見上げ出した。不審に思った二人も一緒に上を見ると、一番上の通路を駆け抜けるコーラル達の影が見えた。

箱を開けて回るコーラル。いくつかの箱を開けていくと、小さな小箱の入っている箱があった。小箱を取り出したコーラルがその蓋

を開けると、小さな金属のカードキーが入っていた。それを慎重に取り出すと、コーラルは右手でギョツと握りしめる。

それが合図になったかのように、下にいたガーディアン達は銃状の腕を天井に突き上げると、コーラルに向かって一斉に攻撃を開始した。無数の銃弾が下から飛びかかり、天井と通路に傷をつけていく。その中心のコーラルは弾に当たらないように体を屈めながら走りだし、何とかこの部屋から出ようとした。ミリとジャンもその状況に気づいたが、あまりにも激しい攻撃に助ける事も出来なかった。

「こいつらー！」

そのガーディアン達を止めるためにロック達も攻撃をするが、そのロック達を止めるためにガーディアンの群れの一部が彼らに襲いかかって来る。数こそは大したことは無いが、二人の周囲を取り囲み、さらに波状攻撃で二人に息つく暇を与えない。そのため勢いに押しこまれた形のロック達は、互いに背中合わせになりながら多数のガーディアンを相手にする体勢を取らされてしまった。

「これってちょっとヤバいんじゃない」

「そうだよな。どうしよう」

リカルの言葉に口では同意しているが声がそうではないロックに気がついたリカルが、前に構えたままそつと後ろを向いて彼の横顔を見ると、彼の口の端は笑みでつりあがり、鋭く見ひかれている目には怪しい光が光っていた。それはリカルがロックとプレートをめぐって戦った時見せた、危険を前にしてなおその状況を楽しんでいる表情だった。いつ見てもやはりいい感じのしない表情だが、今はそんな事を言っている場合ではないと気を引き締め直して、リカルは前に向き直った。

「リカル、お前はそのまま前の相手を叩いて囲みに食い込んでくれ。オレも後から手を貸す」

そう言うと同時にロックはAPRの弾丸を榴弾モードに変えてから、正面のガーディアンに攻撃を行う。圧縮したプラズマの榴弾が

ガーディアンに当たると、解放されたエネルギーが周りの連中を巻き込んで爆発する。リカルもロックに合わせて自分の正面のガーディアンに突撃する。今度は格闘戦用に両手にナイフを持ち、多少ガーディアンからの攻撃を喰らうのを覚悟で囲みの中に入り込んでいく。

縦に横にとガーディアンを切り伏せながらガーディアン達の中に入り込んでいくが、彼らもそれに対し仲間を集めてリカルの道をふさいでいく。それでも包囲網を抜け出そうと頑張るリカルだが、一人ではやはり無理があり、徐々に前進するスピードが落ちていく。

状況が変わったのは、ガーディアンの群れに阻まれてリカルが足を止めてからだった。三体のガーディアンに行く手を阻まれ進めなくなった時、後ろから伏せるとロックの声が聞こえたのですぐに言われたとおりにすると、彼女の頭の上を光が横一閃に走る。すると目の前のガーディアン達は胴体の上と下を真つ二つに切られてその場に崩れ落ちた。すかさず立ちあがったりリカルがその残骸を弾き飛ばすと間髪を入れずにロックが前に飛び込み、手にしている光の刃で更にガーディアンを斬っていき、リカルもロックの後に続いていく。

「もう切り札出したの。随分とあつけないわね」

「この状況じゃ仕方ないだろ、とにかく早く抜け出さねえと」

ロックに追いつき、彼の隣でリカルはまた構え直すと、二人はさらに勢いをつけてガーディアン達の包囲を突きぬけようと攻め込んだ。

そうやって下でロック達が戦っていたため、コーラルに対しての攻撃は先程より弱くなっている。この機を逃さないよう三人は次の部屋への扉に向かって、上層部のフロアーを全力疾走している。そしてフロアーの端まで来たところで、三人は床を大きく蹴りつけるとそのまま飛び出し、下にある扉めがけて落ちていった。

落ちていく時も多数の銃撃にさらされたが、ガーディアンの包囲網から抜け出したロック達が文字通りガーディアン達をなぎ払い、

彼らへの攻撃を妨害していたため初めの時ほどの勢いは無くなっていた。同時に二人は前に駆け抜けてその三人との合流を果たそうとする。残ったガーディアン達は執拗に彼ら五人に対して射撃を行い、地面を走っているロックとリカルはそれに対して応戦しながら扉へと急ぐ。

ダンツ、と大きな音と共に地面に着地する三人。はいているブーツのおかげで高所から落ちててもケガは無かったが、着地時の衝撃で三人とも足がしびれて動く事が出来なかった。それでも狙い通り、扉の前のカードスリットの前に着地したコーラルは、足のしびれに耐えながら先程手に入れたカードを手にすると、機械にカードを通してから手のひらをスリットの隣の認証機に押し当てた。するとピ―と高い音と共に鍵が解除され、扉が左右にスライドして開いた。扉の中に入ろうとしびれる足を引きずる三人。その三人の腕をロックとリカルがそれぞれ掴むと、五人は倒れ込むように扉の中に飛び込んだ。

扉が閉まると同時に銃弾が扉に当たる音が聞こえたが、それもほんの少しの事でその後は静寂が辺りを支配した。五人とも、息をひそめてその場から動く事は無かったが、扉に変化が無い事が確認されると、誰かが小さく安堵のため息をついた。

「どうにか、切り抜ける事が出来ましたね」

コーラルが声を発すると同時に、それぞれが緊張させていた神経を緩めてその場に座り込んだ。

「あー驚いた。まさかあんなにたくさんガーディアンが襲ってくるなんて思わなかった。凄かったねロック」

そう言っリカルはロックの方を向いたが、ロックはそのリカルに腕を伸ばすとむんずと彼女の胸倉を掴み、顔を真っ赤にしながら彼女を大きく揺さぶった。

「一番驚いたのはオレだ！いきなりあんな、へ、変な事しやがって。おかげで無茶苦茶苦労したじゃねえかよ。よりによって正面からぶつけやがって」

逆立つたシツポをそのままに牙をむき出しにしながらロツクはさらりリカルに言いより、リカルはその目を見ない様にそっぽを向いて笑っている。コーラルがロツクをなだめ、ジャンがその手を外そうとしていたが、不意にジャンがリカルにこっそり耳打ちを始めた。

「しかしよくやるよな。手伝わないって言っている奴を当事者に仕立てて無理やり大変な方を割り当てさせるなんて、おめえも悪い奴だぜ」

「ま、嫌がる相手を働かせるにはそうせざるを得ない状況を作ればいいだけだからね。アイツには悪いけど動いてもらわなきゃ大変だったから」

そう言うとりカルはジャンに向けて片目を軽くつぶって得意げなウインクをする。ジャンもそれを見て軽く笑い、感情が高ぶっていたロツクはただ一人、そこまで洞察することが出来ずに支離滅裂な言葉と共にリカルに掴みかかっていただけだった。

5th ACTION 第二の試練(1)

大部屋の試練を無事にクリアした五人は、薄暗い通路を奥に向かって歩いていく。コーラルとお供の二人が先頭を歩き、その後ろを少し遅れてロックが、その彼に合わせて最後にリカルが後ろを歩く。ロックは片手に筒状の機械を、もう片手に工具を持ち、歩きながらその機械の調整を行っている。

「器用なものね、歩きながらそんな事ができるのですから」

「ホントね。アタシも壊れた物はなるべく自分で直すけど、歩きながらは流石に出来ないわね。所で何を直してるの」

「剣。さつき使った分、調整しなおしてる」

先程の事をまだ根に持っているのか、ロックはぶつきらぼうにリカルの質問に答えた。

「剣？粒子波動刀の事？エネルギー系の剣ってそんなまめに調整しないと駄目だったっけ」

話しながらリカルはロックの隣に並ぶと、彼が持っている筒状の機械、エネルギーソードの発生装置に視線を落とす。

粒子波動刀と呼ばれたロックの剣は、波動エンジンに粒子力学の技術を盛り込んで開発された先史文明最高の半永久機関、粒子波動エンジンから派生したものである。粒子力学とは現世における全ての事象は粒子単位で測れるというもので、その理論を基に作られたこの剣最大の特徴は、全ての物質の分子結合に干渉することで対象を分解、それを高速で行うため見た目には物を斬り裂く様に見えるのだ。

「これ元々小型のエンジン。それを好き勝手にいじったから、最大出力で長時間動かせない。もう少し後で使いたかったのをお前ってやつは……」

「だからゴメンって言うてるでしょ。もう許してよー」

そう言っつて、先程からロックに対して謝っていた彼女はもう一度

自分の目の前で両手を合わせると謝罪の意思を表す。それを聞いたロックは、それが自分の意思表示であるかのように大きな溜息を一つ吐き出すと、それっきり、何も話さず態度にも出さずに機械の方に集中し直した。

「全くガキなんだから」

ロックの態度に気分を悪くしたりリカルは、誰にも聞こえないような声でぼそりと悪態をつくくと、次は小さく溜息をついた。それもそのはず、出会った時の彼は大人っぽい落ち着いた感じの少年だったが、一緒に旅をするようになってからの数日、彼は宇宙船の基本部分の調査以外はほとんど自分の興味のある事にしか時間を使わず、思った以上にわがままな部分もあったため、リカルは少なからずギヤップを感じ、人の印象はここまで変わるものなのかとさえ思うようになった。うなづいていたからだった。

しばらく歩いてからもう一度リカルが口を開きかけた時、一行は次の試練の扉の前に立っていた。

「ここが二番目……。兄さん、ここはどうすればいいのですか」
剣の調整を終わらせたロックが工具をポーチに戻しながらコーラルに次の試練の内容を聞く。しかし彼は申し訳なさそうな顔をする。と、突然ロック達に謝りだした。

「ゴメン、実は詳しくは分からないんだ。ガーディアンが次から次に、あふれる位にたくさん出てくるのだけど、どうすればいいのかが分からなくて」

「ガーディアンが次から次へと出てくるか」

「何か知ってますか。良かったら話して下さい」

「トラップの一種よ、解除するには指揮しているガーディアンを倒せばいいの」

「指揮ガーディアンってどうやってたら分かるんだ」

「見てみないと分からないわね。大体は出てくる物とおんなじタイプの強化型だけだ」

そう言うとりカルはコーラルに目を移した。しかし彼は詳しい事

を知らないらしく、目を下に伏せると軽く首を横に振った。出たとこ勝負ねと、それを見たりカルが呟き、それに合わせて他のみんなも力強く頷いた。

全員がそれぞれ武器を手にした事を確認したコーラルは、ゆつくりと正面の扉に向き直ると、その扉を開いた。扉が開いてから五人が部屋の中に歩み入ると扉が閉まる。その瞬間、部屋の壁に穴が開き、ガシャンガシャンとけたたましい足音と共に多数のガーディアンが部屋の中になだれ込んできた。

「うわ、ずんぐりむっくりしたのがわんさか出てきたな。何だっけこいつら」

「パニード、ガーディアンの中では弱いランク。手の様な球体を使っての打撃攻撃が中心で、とげを飛ばしてくる種類もいる。その体型上、意外と硬くて数が多いと厄介な相手よ」

リカルが解説をしたパニードと言うガーディアンは、球状のパーツで体の全体を形作っており、見た目にはまんまるなダルマの様な个体である。一体や二体ならばその外見のため可愛らしいという感想が出てきそうだが、それも百を超えて目の前でさらに増え続ける様は恐怖であり、不気味であり、思わず失笑してしまうほどに呆れてしまいそうな、ある意味壮大な光景だった。一番初めに出てきたパニード達が五人に向きを変えると、腕を体の前にかまえると移動速度を上げて一直線に向かって来た。

「来た。リンちゃん、どの个体が指揮官がわかる」

「まだまだ。指揮个体は大抵後ろに控えているから、見つかるためには動きをよく見て。あいつらは必要最低限しか動かないで手下のガーディアンを使うから」

ミリーの声に冷静に答えるリカルは、空銃で迫ってくる彼らを攻撃するが、彼らに当たった空気の弾はその場で弾けて消滅し、効果的なダメージを与えていなかった。ロックもAPRを使って彼女の隣で攻撃を行うが、体の表面を焦がしたり歩く速度を遅くしたりは出来たが破壊するほどの決定打を与えるまでにはいかなかった。

そして他の三人は遠距離に対する効果的な武器を持っていないため、それぞれの武器を手に構え二人の行動を見ているだけだった。

パニードとの距離がさらに近付いてきた所で、二人は構えていた銃を下ろして別の武器を取り出した。ロツクは左手にロッドを、右手に粒子波動刀を持って二刀流の構えをとり、リカルは右腕のアームガードに普通の搭乗用とは少し形の違う、拳闘用にカスタマイズをしたSスティックを取り付け、左の拳にはメタルナックルを装備した。徐々に近づいてくるパニード達。五人は手にしている武器をギョツと力強く握りしめ、それぞれが自分の飛び込める間合いの線引きをしている床に視線を落としていた。

一歩一歩近づくパニードがある部分を通過した時、一番初めに動き出したのは意外にもコーラルだった。彼はブーツに仕込んであったスケートタイプのRSを静かに起動させると、少し体を屈めてから一気に駆けだした。スケートタイプのRSは、ボードタイプやスティックタイプと比べると速度や加速力はまるで無いが、靴の中に簡単に仕込む事が出来るので、こうした足では詰め寄れない間合いをかける事が出来る。

一気にパニードの眼前に飛び込んだコーラルは、スケートを使って体を大きくひねると横に構えたスタッフで彼のボディのまんなかを思いきり叩く。遠心力をつけた一撃はパニードの頑丈なボディに大きくなくぼみを作り、他のパニード達を巻き込んで大きく後ろに吹き飛ばした。

その一瞬の事にあっけにとられたが、それでもリカルがスティックを使って、その後を追うように飛び出した。一瞬でコーラルの隣に並ぶと、右腕につけたスティックを全開に吹かす。そして彼女は短く吠えると目の前のパニードを殴り飛ばした。殴られた衝撃で体の半分近くがへこんだパニードは力なく飛んでいくと壁に激突。火をふきながらずりずりと地面に落ちていった。

そのすぐ後にロツクも駆けつけると、彼はリカルとは反対側にコーラルの隣に立った。彼は特別何かをした風には見えなかったが、

十メートル近く離れていたこの場所に気配を感じさせずに現れると、右手の刀でパニードを切り裂き、左手のロッドを前に突き出すと後ろから迫ってくる連中に雷の魔法を浴びせた。斬られた仲間の陰からの不意打ちに対処できなかった彼らはまともに攻撃を受け、特に至近距離にいた数体はその身体をショートさせながら床に転がった。三人が作った場所にジャンとミリーもたどり着くと、彼らは後ろを振り向いて背後を守る隊形を作る。そしてすぐにコーラル達とガーディアン・パニード達との戦いの幕が切つて落とされた。

初めから劣勢なのは分かっていたが、それに対して弱音を吐いた者は一人もいなかった。その中でもロツクとリカルは、もともとそのような事など頭の中にすらない様に眼前のパニードに冷静に対処し、余裕がある時は他の仲間達の様子を見るなどしていた。それでも五分もすると全員に疲れが見え始め、その動きにも鈍りが見え始めてきた。

冒険者の二人は一応ペースを考えながら戦っているのですが他の三人より見た目には普通だったが、彼らの使っている武器の方が疲弊の色を見せていた。特にロツクの剣は、彼自身が言っていたように長時間高出力で使う事が出来ず、今は出力を落として棍の様に使っていた。発生させる粒子の質を変え、放射出力を低くする事で刃物の様に物を斬る事は出来なくなるが、それでも鉄以上の硬度を持つその一撃は、パニードのボディを確実に傷つけていった。

そのロツクの隣で戦っているコーラルは、スタツフでパニードのボディを叩いて彼らに致命傷を与えると、他の仲間達を巻き込んで後ろに吹き飛ばす戦い方をずっと繰り返している。吹き飛ばして穴を開ければ、その穴を埋めるために別のガーディアンが入ってくるためその分ターゲットが入れ換わりやすいと考えての事だった。確かにたくさんのガーディアンが入れ換わりで入ってくるためその作戦は成功していた。ただ一つ誤算があるとすれば動作の大きい動きを繰り返しているため、コーラルの体力を余分に使わせているという所だった。そのため新たに正面に立ったパニードを倒した時に、

コーラルは勢い余って転んでしまった。

前のめりに倒れたコーラルが立ちあがるうとした時、前の方で何かが動いた。目を凝らしてそれを見ると、周りのパニード達よりかなり小さい深い青色のボディカラーのパニードが目の前でちょこまかと動いていた。コーラルとその目があうと、小型パニードは小さく跳ね上がり一目散にパニード達の間を走りぬけていった。一瞬の事で思考が一時停止したコーラルが、今のがターゲットかもしれないことに気づいたのとほぼ同時に彼の頭上でパニードが腕を振り上げており、それに気付いたロツクとリカルが同時にコーラルの体を掴んで強引に彼の体を起こした。

「いたあ！つていたたた、痛い」

反射的に二人はコーラルの体を掴んだため、リカルは彼の髪の毛を、ロツクは背びれを掴んで持ち上げた。突然の体の痛み思わず悲鳴を上げたが、目の前に振り下ろされたパニードの腕が鼻先をかすめて地面を叩きつけたのを見ると、流石に叫んだ声を飲み込んで姿勢を正した。

「ふいー、間一髪。コーラル兄さん大丈夫か」

「痛かったけど助かりましたよ、ありがとう。ってそんな場合じゃない、見つけたよ指揮官を」

「ホント！どんな奴だった、どの辺りにいるの」

危機を脱したコーラルが思い出したように自分の発見を伝えると、リカルはこの状況を打開できる鍵が見つかった事を確信してターゲットの所在を聞こうと声を出す。それに答えるコーラルは、少し遠くの方を指さした。

「何だかすごく小さいガーディアンが、他のガーディアンの間を抜けて向こうの方に走っていくのを見ました」

「小さいガーディアン？リカル、一体……」

「寄生型のガーディアンね。またえらく厄介なタイプが指揮を執っているもんだ」

「ニヤに寄生型？寄生型ってあれか。他のガーディアンにくつつ

いてこつそり活動するタイプのヤツ」

「宿りを倒しても本体が生きている限りはその宿りを操る。ここには寄生できる宿りがいくらでもいるから厄介ね」

「おう、それならどうする気だ。ガーディアン片っぱしから倒すなんて事、不可能だぜ」

三人の会話に割って入って来たジャンンの言葉に、彼らはそろって口を閉じてしまった。方法を考えるためでもあったが、激しくなってきた戦闘のために話をしている暇が無くなって来たからだ。

「ねえ誰でもいいから一発、強力な一撃をかます事出来ない？」

「ええっ何よまた突然。急にそんなこと言われたって何とか出来るもんじゃないでしょ」

パニード達の波を押し返すと、リカルが早口で周りのみんなに質問をする。その内容にミリーは反論を唱えるが、すぐに彼女の声を遮るようにロックが声を上げた。

「いや、一つお望みの力を持っている魔法がある。でも準備に時間がかかるし効果範囲が狭いからターゲットが分からないと使えねえぞ」

「それで充分。アタシが何とかするから、ロックはいつでも攻撃できるように準備して」

話をしている最中にもやってくるパニード達を払いのけていくリカル達。彼女が腕のスティックのバーニアを吹かして横に払いパニードを弾き飛ばすと、右腕にはめている腕輪に左手を添え、呟くような声でしかしはつきりと言、トランスと唱えた。

腕輪が一瞬光ったかと思うとその形が変形していき、次の瞬間右腕の腕輪は彼女の左手の中で拳銃のような物に代わっていた。物体を別の物に変える魔法は魔術の基本であり、力があれば大体の人が使うことのできる術である。彼女が手にしたのは魔力を弾に変えて発射する魔導銃で、少女が持つにはやや無骨なフレームをしているが、取り付けられている装飾の魔石やルーンラインなどがそのイメージを打ち消し、銃のシャープさを引き出していた。

その銃を両手で構えたりカルは短く縮めた言葉で呪文を唱えると、パニードを吹き飛ばして作った空間に向かって発砲した。発射された魔法の弾が地面に当たると人の背丈ほどの水晶が現れ、パニード達の前進を阻んでいった。更に彼女は続けざまに魔法を打ち出しては水晶の柱を作っていき、それらをつなげる様にして水晶の壁を作った。

作った壁がパニードをしつかりとふさいだ事を確認してから、リカルは他の四人と離れてパニードの群れの中に入っていく。それを見たコーラルは彼女の後を追いかけようとしたが、追いかけていいとロツクが大声で叫んで彼の腕を掴んだ。

「でもそんな事言っただって、いくらハンターだからって、女の子が一人でガーディアンの群れの中に突っ込んで言っただけで済むとは思えませんよ」

止められたコーラルは、悲鳴に近い声でロツクに抗議をするが、ロツクはどこか確信のある顔で彼女のいなくなった方を見ていた。そしてコーラルの腕から掴んでいた手を離すと、ロツクは彼の隣に立ち直して構えを取った。

「ハンターだからこそ、自分で何とかするといった以上、何とかしてくれませよ。そうでなきゃ一人で飛び込んで行ったりなんか出来ませんから」

「若、ここは信じて待ちましょう。あの娘の実力は確かなものです、我々も自分の出来る事を致しましょう」

その二人の会話に、以外にもジャンが横から入ってきて、リカルの事を信じる様コーラルを諭した。

「へえ、こりゃ驚いた。アンタにオレ達の事良く言われるとはね」
おどけた調子でロツクが話すと、ジャンは別の方から迫ってきたパニードを電磁アックスでなぎ払ってから、荒い息と一緒に言葉を吐き出した。

「あれだけの物を見せられたら、認めるしか無いだろ。それにこの状況を何とか出来るってんだったらお前らに掛けさせてもらうだ

けだ。とりあえず守ってはやるよ」

「頼もしいな兄さん。でもオレは守ってもらうより突っ走る方が性にあってるんで、気にしなくていいぜ」

そう言うところ、ロックは、背中から近づいてきたパニードを粒子刀で突いてダメージを与えると、回転をつけて振り向きそのボディに思いきり蹴りを見舞い、彼を吹き飛ばした。次いで一步前に出て地面を踏み締めると、粒子刀の出力を一瞬だけ最大に上げる。すると暗青色をしていた粒子刀の色が鮮やかな緋桜色に変わりだす。色が変わった事を確認してから粒子刀を大きく横にふるうと、同時に本体部分についているスイッチを押しこむ。その瞬間粒子の刀身が本体から離れ、三日月状のエネルギーの波が飛び出した。

ロックが作りだした波はものすごい勢いで飛んでいくと、進路上のパニード達全てを切り裂きながら、勢いが衰えることなく真っ直ぐと飛んでいく。ついには部屋の壁に当たったが、何でも斬るといふその粒子は壁に傷をつけ、形を維持できなくなるまで部屋の壁を削っていた。

その攻撃を見てあつげにとられた三人を、ロックは首だけ向きを変えると、ピンと立っているシツポ越しににんまりと微笑んで見ていた。

5th ACTION 第二の試練(2)

ロック達が戦っていた頃、リカルはパニード達の頭の上を飛び跳ねる様に駆け抜けていた。遺跡に入ってきた侵入者を排除するために起き出した彼らガーディアン・パニードは、倒すべき相手を見つけると一斉に取り囲み、攻撃を開始する。そのパニード達の群れの中に飛び込んだリカルは、彼らでひしめく空間の隙間を縫うようにして走っていた。走っている時にパニードの一体が、球体で出来た腕を振りかざして叩きつけてきたが、彼女は狭いスペースの中に閉わらず危なげも無くその腕を避けると、次の瞬間その腕の上に乗って彼の頭の上にジャンプ。頭の上に着地すると、そのまま頭の上を走りだして今に至る。

常に動いていて不安定なパニードの頭の上を、スピードを落とすことなく走れるバランス感覚の良さは獅子族である彼女ならではの芸当である。そうして部屋の隅にやってきたリカルは、研ぎ澄まされた爪を指から出すと壁に向かって大きく飛び跳ね、壁に掴まった。両腕で壁に掴まった後、足を振り上げ壁をつま先で鋭く蹴りつける。遺跡の壁に使われている特殊合金で補強しているブーツは、壁をえぐって足を引つ掛ける部分を作り出す。

そうして壁に身体を固定すると、右手を壁から離して腰の空弾銃を手に取る。グリップの近くにあるスイッチを片手で押すと、銃の後部が開きそこから空気を取り込み始める。弾丸とする空気を溜め終わると、今度は別のスイッチを押して取り込んだ空気を圧縮し始める。チンと、空気の圧縮が完了した事を伝えるチャイムが鳴ると今度はトリガーに近い所にあるスイッチを押した。すると銃口が開いていき、その口径は一回り大きな物になった。

「ロックいくよ。準備はいい？」

自分の準備を全て終わらせてから、リカルはインカムでロックに呼び掛ける。一方地面でガーディアンと戦いながらその連絡を待つ

ていたロツクは、周りのみんなに彼女の無事を伝えてからインカムに出た。

「オーライ、こつちもいいぜ。で、具体的にどうすればいい」

「簡単よ。これからパニードを一か所に集めるから、そこを狙って攻撃して。部屋にいるヤツ全部集めるから指揮官も倒せるはずよ」

ロツクの了解と言う返事を聞いてから、リカルは身体をひねって空銃を構えると、自分のいる位置のほぼ対角線上の部屋の隅に狙いを定めた。

「さあ、ダンスの時間だよ。アンタら全員踊り狂ってもらうかね。喰らいな、バース・トーネード！」

掛け声と共に彼女は銃のトリガーを引く。大きな音を出して銃が一瞬唸ると、次の瞬間いつも撃っている物よりも大きな弾丸が飛び出し、空間を切り裂いて駆けていく。そして反対側の壁に当たる少し手前、突然弾がはじけて大きな真空の渦を作り出し、周囲の物を飲み込みだした。渦の近くにいたパニードは残らずそれに巻き込まれ、そこから輪が広がっていくようにパニード達がどんと空中に舞い上がり、そして全てのパニードが真空の塊の中に吸い込まれていくのに、そう時間はかからなかった。

「なんて事を……きゃあっ！」

「ミリー、掴まって」

「若！ええいくそう」

「あのバカ、こんな手使うんだったら初めに言っておけよな」

パニード達を巻き込む風は、彼らよりも軽いロツクやコーラル達にも影響を与えていた。何とか飛ばされないようにと、コーラルはSスケートでバランスを取りながらジャンとミリーと協力してその場で踏ん張っていた。ロツクは背中ホルダーに収めていたSポードに乗ると、突風に流されない様にバランスを取った後、全てのパニードが集められた空間を睨みつけた。

「ロツク、何をする気だい」

ロツクの行動に気づいたコーラルはあらん限りの声で彼に問いか

ける。彼は振り向く事無く、大きくは無いがこの状況でもよく聞こえる鋭い声でそれに答える。

「状況はともかく、お膳立ては完了しましたからね。これから自分の仕事をしてきますよ」

「無茶だよこんな場所で。せめて風が収まってからにした方が」

「無茶は承知の大バクチ。ギャンブルは、出来るか出来ないかじゃないですよ」

「何、やらなくちゃいけないとでも言うのかい」

叫ぶようなコーラルの声に反応を示したロツクは、ボードごと身体をひねってコーラルの方を向いた。その顔は、気を抜けば吹き飛ばされそうなこの風の中で、異様とも言えるほどにまぶしい笑顔だった。例えば青空に輝く太陽の様な顔で、ロツクは大声でコーラルに答えた。

「ギャンブルは、それをやっている人間がやりたいと思うからやるんですよ」

話をしながらロツクは視線を少し横にずらす。目を動かした先にはリカルが、風に吹き飛ばされないようにと壁に張り付いて、懸命に踏ん張っていた。この状況を作る引き金を引いた彼女と目があつた時、彼女は無言で力強くロツクに頷いた。それを受けてロツクも彼女に頷くと、彼は乗っているボードを動かした。

「これは、オレがやりたいと思っっているからやるんだ」

そう言うと同時にロツクは軽く宙に浮くと、吹き荒れる風に飛ばされていった。驚いたコーラル達が思わず彼の名を叫んだが、彼はすぐにボードを操ると風に乗る、その風に身をまかせながら嵐の中心を目指し始めた。両手でしっかりとロツドを持つと、低い声でしっかりと呪文を唱えて、魔法の力をロツドに紡いでいく。

ロツドの先端の魔石に淡い輝きが灯った事を確認したロツクは、風に乗る動作から一転、ボードの先端を中心点に向けてと嵐の中を強行突破していく。横から叩きつける様に容赦なく吹いてくる風に負けじと、巧みにボードを操っては前へ前へと進んでいき、ついに

彼は真空の渦に捕えられたパニード達の前にたどり着いた。渦に巻かれて宙で回転しているパニード達。ロツクはその渦の回転速度が徐々に落ちていているのを見て時間が無い事を察知し、急いで勝負を決めようとロツドを高く掲げると最後の言葉を唱えた。

「落ちろ鉄追、舞い上がれ電気の花びら。サンダークラッシュ・ボム！」

声高に言葉を唱えながら掲げたロツドを振り下ろすと、細い電気の糸が縦に幾重にも走り、次の瞬間大きな雷が部屋の天井付近からパニード達に向かって落ちてきた。雷を受けた彼らは、ある者は爆砕し、またある者は一瞬でその身体の機能を停止させ、さらに雷の直撃を受けなかった者も、舞い上がる電気の粒子が生み出す力場の影響で深刻なダメージを受け、渦の中の大半の彼らは、自らの役目を果たせぬままその身を失う事となった。そして彼らの大半を葬ったロツクは、先程より更に弱くなった風に乗りながら、彼らの残骸を注意深く観察していた。

「……！！やべえ、しくじった」

残骸の中からロツクが見つけた物は、小さな身体に深い青色の指揮官パニードの姿だった。彼はロツクの放った一撃を耐え切り、奇跡的にも大したダメージを受けていなかった。

宙に浮いた状態で、目を光らせながら電子音を鳴らし新たな指示を与えている姿を見たロツクは、風の呪縛が弱まり他のパニードが動き出す前に倒そうとAPRを構えると、指揮パニードのいる辺りに向かって弾を乱射した。しかしパニードを捕えている竜巻は、ロツクが撃ち込んだ弾の軌道を逸らしてあらぬ方向に弾を吹き飛ばしてしまった。苦々しい表情で小さく舌打ちをしたロツクは、APRの銃弾のタイプを変えると同時にエネルギーをチャージし直し、更に右手にロツドを構えると早口で先程の魔法の呪文を唱え直して、何とかパニードを倒そうと準備をしていた。

「ロツク、離れなさい」

その時、ロツクの後ろから彼を呼ぶ声が聞こえた。その声を聞い

たロツクが呪文の詠唱を止めて後ろを振り返ると、なんとコーラルがこちらに向かつて走ってきていた。突然の乱入に驚いたロツクは彼の言葉通りに立っていた場所から離れる。ロツクと入れ替わりで走ってきたコーラルは、竜巻の前で立ち止まると両手でスタッフを引く様に構え、力を込め出した。コーラルが集中を始めると、彼の^{オーラ}気力がスタッフの先端に集まりだして、淡い青色に光っていく。

光るスタッフを構えたまま、コーラルは竜巻の先にいる、先程自分が見つけた小さなパニードを睨みつける。そうしている間にも風の力はさらに弱まっていき、竜巻の中の生き残ったパニード達は、身体をゆっくりと動かし始めていた。

張り付いていた壁から離れて地面に足をつけたリカルもその光景を見ていたが、視界の端に何かがうごめくのを捉えたためその方向を見て、思わず表情をこわばらせた。壁の穴の中から、追加のパニードがどんどんやってきていたのだ。もし指揮官を倒せなければ初めの状態に戻ってしまう。そうならさすがにもう駄目である。

「新手が出てきた、誰でもいいから早く指揮官を倒して」

リカルの声と、コーラルの目の前の竜巻の気流が乱れたのはほぼ同時だった。その一瞬を見切ったコーラルは、竜巻の中のパニードに向かつて鋭く突きを放った。オーラで強化されたスタッフは風の壁を貫いて真っ直ぐと伸びていき、スクラップに守られている指揮官にヒット。大きなダメージを与えると同時にそのまま押し出していき、竜巻の中からそのボディを弾き飛ばした。

その一連の動作を離れた場所から見ていたロツクは、吹き飛ばされた指揮官にAPRを構えると、彼の動きを追いかけて引き金を引く。APR内に溜めていたエネルギーが銃口に集まりだし、圧縮された弾丸のプラズマが薄い黄色から濃い色に変わった瞬間、その引き金から指を離した。

発射された弾は通常のものよりふたまわりほど大きなものだった。発射の時の反動もそれに見合った大きさで、ロツクは両足で踏ん張らなければ後ろに倒れそうになった。放たれた弾丸は真っ直ぐ飛ん

でいくと吹き飛ばされた指揮官を狙い通りに撃ち抜いた。撃たれた指揮官は自然な放物線を描いて地面に落下すると、火花を散らしながら小さな爆発を繰り返す、ついに動かなくなった。

そして彼の沈黙と同時に部屋の中にいた他のパニード達も機能を停止、その場に座り込んで動かなくなる。リカルが起こした風が完全に止まると、その風に巻き込まれた大量のパニードは大きな音を立てながら一斉に地面に落下した。その落下が収まったのを見て、ようやくロツクは構えていたAPRを下ろしてコーラルの所に歩き出した。

コーラルはスクラップの前に立ち尽くしたまま、肩を上下に動かしながら大きく息をしていた。自分のしたことが今一つ信じられなといった表情で、目の前の山をただ茫然と見ていた。

「コーラル兄さん、お見事でした」

横からロツクが声をかけながら彼の肩を小さく叩く。コーラルは小さくその身を震わせたが、すぐに振り返ると目の前にいたロツクの顔を見て、軽く微笑んだ。

「ありがとうロツク。君のおかげでこの試練を突破出来ましたよ」
「何言ってますか。あの時兄さんが来てくれたからアイツを倒せたんです。間違いなく、兄さんのお手柄ですよ」

「そ、そうかい。冒険者の君にそう言ってもらえるならよかったかな。それよりみんなは、みんなは無事かい」

コーラルが思い出したように辺りを見渡すと、彼らの近くにジャンとミリーが並んで立っていた。さらに二人の位置と違う方向の少し後ろ側から、リカルが手を振りながらロツク達に向かって歩いて来ているのが見えた。

「おーい、こっちこっち」

リカルの姿を見つけたロツクは、声を上げると両手を頭の上で大きく振って彼女に合図を送る。それを見たリカルは、嬉しそうに小走りで彼らのいる場所に近づいていき、ロツクの目の前で足を止めた。笑顔で上目づかいに自分を見ている彼女にロツクも笑顔で返す

と、すばやく右腕を振り上げるとそのまま彼女の頭めがけて平手を振り下ろした。ボスつと肉球のくぐもった音が部屋に響くと、彼女は両手で頭を押さえて軽くうづくまってしまった。

「いったーい。一体何すんのよ」

「何すんの、じゃ無いだろが。竜巻を発生させるなら初めにみんなに伝えておけよ。オレはともかく兄さん達がヤバかったじゃねえかよ」

そう言うのとロツクは親指で後ろのコーラル達を指さした。リカルは彼らの方を一瞥するが、すぐにロツクとの会話に戻っていった。

「そんなの大丈夫でしょ、アンタの腕ならそこらへんとかの事は、こう軽々と」

「流石にそこまで出来るわけねえだろ。てか、お前にオレの技量がわかるのかよ」

「分かるわよ、それなりに年季持っているから、少なくとも同業者のレベルはその人を見て大体は把握出来るもの」

「そ、そうか。まあそれは分かったけどよ、やっぱり周りも巻き込む様な危険な事をする時は一言言ってもらいたかったぞ」

しかし、ロツクの言葉を聞き終えた時、リカルは急に目元をつり上げると、ロツクにくっついてかかって来た。

「何よいちいちうるさいわね、男だったら小さい事こだわるんじゃないわよ。アンタ子舅みたいよ」

「あ、なんだそりゃ。危ない、気をつかえって言っただけでどうしてそこまで言われなきゃなんねえんだよ。大体こんな事で男も女も関係あるかよ」

売り言葉に買い言葉、リカルの言葉に気を悪くしたロツクも彼女に対して文句を言いだし、さほど時間もかからないうちに二人はヒートアップして、顔を突き合わせての口喧嘩に発展していった。

「あの二人とも、せめて部屋を出てから話を続けませんか。こんなガーディアンが残骸だらけの所にずっと留まるのもいい気分じゃないですし」

二人のやり取りを見ていたコーラルが、遠慮がちに彼らにそう提案をすると、二人はお互いの目を見た後にフン、とそっぽを向くと、そのまま並んで遺跡の奥の通路に向かって歩いて行った。それを見てコーラルは深く息を吐き出すと、後ろの二人の方を振り向いた。

「いやいや、全く若い子の思考って本当によく分からないよね。こんな危険な場所で喧嘩が出来るんだから」

「いやいや若、あなたも充分若いのですからその発言はどうかと思います」

「それに彼らの場合は、元々の思考や育った環境が特殊なだけで、簡単に分かる人はそういないと思います」

「いや駄目だよ。五、六歳ほど年が離れていると、それだけでその年代の人達の考えが分からない事って結構あるからね。それと」
「そこまで言ってから彼は腕を軽く身体の前で組むと、軽くあごで後ろの方に合図を示して話を続けた。

「あのくらい神経が太くなくて、とても冒険者などとしてはいられないという事だね」

「確かにそうだと思いますがね、でも私が思うにそれは冒険者だからでは無くて……」

「ちよつと三人とも遅ーい。部屋出ようって言っただつたら早く来る」

「兄さん達、早く行きましようよ」

その時彼らの話を遮ったのは、先程まで言い争いをしながら部屋の出口に向かつて歩いていったロツクとリカルの二人だった。言いたい事を言い合って機嫌が直ったのか、二人して並びながらそれぞれ片手を大きく振り、シッポも鉤ツメの形にゆっくりとくねらせていた。あまりの変わり身の早さに驚くコーラル達、その中でさっき話を途中で中断されたミリーは、彼らを見ながら言えなかった言葉の続きを声に出す。

「彼らはネコ科の種族だから、気まぐれなだけでしょ」

あきれた調子で言い放ったミリーに苦笑を浮かべると、コーラル

はゆっくりと彼ら二人の方に近づき、残りの二人もコーラルについて歩き出す。そしてロック達と並ぶと、彼はここで一度休憩をする事を提案してきた。ロック達二人も異論が無かったので、オーケーとふたつ返事で頷くと、五人は部屋を出てすぐの通路で休むために歩き出した。

ガーディアン・パニードとの壮絶な長期戦を繰り広げた小部屋を後にした五人は今、部屋を出てすぐの通路で腰をおろしてそれぞれ休憩を取っていた。ロツクは先程の戦闘で使えなくなった粒子波動刀を分解して一から修理を行い、リカルは少し距離を置いて彼と背中合わせになるとあぐらをかいて座り、手製のフルーツバーをかじりながら進行方向側の通路を見張っていた。ミリーはリカルの隣で膝を抱える様に座ると、疲れのためか抱えた膝に顔を埋めるとそのまま黙りこくつてしまい、ジャンも通路の壁に背中をもたれさせると腕を胸の前で組み、ポーっとしたまま通路の先を見つめていた。そして初めに休憩する事を提案してきたコーラルはロツクの隣に腰を下ろすと、機械を修理している彼の手をじっと見ていた。

「コーラル兄さん。こつちばつか見てないで少し休んだら？」

「うん。でも、いざ休もうとしたら何だか休めなくて。そういう君は休まなくて平気なの」

「こつち言っちゃ何ですけど鍛えてますし若いから、素人さんな皆とは比べようが無いですよ。それより無理にでも休んでおいたほうがいいですよ。いきなり動けなくなったら大変ですから」

話をしながらも機械を触る手を止めないロツク。休んだ方がいいと言っ彼の言葉を聞いて、とりあえずコーラルは仰向けに寝転がると、顔だけロツクの方に向けて話を続けてきた。

「そういえば、先程の彼女との件ですけど、よくあっさりと終わらせる事が出来ましたね」

「ああ……。本当はまだ言いたい事があつたんすけどね、こんな所で言い争って精神状態を悪くするのは探索の面でもマイナスになりますからね。だから一歩引いてこつちから黙って、それで気持ち切り替えて終わらせましたよ」

コーラルの質問に答えるロツクは、口調こそは平静を装って淡々

と話をしていたが、彼のシツポはちぎれそうなほど激しく左右に振られていて、彼がまだ先程の事で怒っている事を表していた。

「随分と彼女の事を気にかけているんだね。何か特別な人？」

「いやそんな、うわついた話じゃないですよ。ただ彼女、女だてらに無茶しまくって、それがもとで色んなトラブル引き起こしているそう。だからそんな危なっかしい女、どうしても目が離せない。ただそれだけです。」

ロツクの、リカルに対する印象を聞いてからコーラルは少し目線を動かすと、今度はリカルの方に目を向けた。フルーツバーを食べ終えた彼女は、視線は変わらず前を向けながら、先程壁に張り付いた時に少し割れてしまった爪をヤスリできれいに研ぎ直していた。

「でもあなたも随分と無謀なことばかりするわよね、初めの部屋の時でも二番目の部屋の時でも。ロツク君だったっけ、あの子随分怒っていたわよ。」

隣に座っていたミリーは少しは体力が回復したのか、顔を少しリカルの方に向けると小さな声で話しかけてきた。リカルはミリーの方に耳を傾けると、顔の向きを変えずに彼女に返事を返した。

「いいのよ、あんな世話になった人の手伝いしないで見てるだけだなんて男らしくない奴。もっと働けての。アタシがハツパ掛けなきゃ何もしないんだから。」

全く駄目な奴よねと呟きながらリカルは肩越しに振り返って、自分の真後ろに座っているロツクの後ろ姿を見た。それに気がついたコーラルはリカルの顔を見ていたが、彼女はそれに気付かずロツクの背中にずっと視線を向けていた。

「ふーん。でも文句ばかり言っている割には、それが本心みたいには全然聞こえないわね。ずっと見ていたいほど気になるの。」

「そりゃ気になるわよ。」

「あらあら、ハツキリと言っちゃってまあ、若い子達はホントに色々早いわね。」

「べ、別に気になる男の子だからとか、そんな事ばかりじゃない

わよ。アイツ冒険に夢持ちすぎて、現実とかキチンと見ていないんだもの。腕と心意気だけで暮らしていけるほど冒険者やハンターは単純な仕事じゃないのに。アタシが見てなきゃあんな冒険バカ、いっぱしの冒険者になる前に立派な行き倒れになるのがオチよ」

そう言うとりカルは一通り研いだツメに目を通して研ぎ残しが無い事を確認してから、手に持っていたヤスリを小物入れに戻すと両手を組んで、大きく背伸びを行った。

「ふふふ、似た者同士ってやつですかね」

二人の、それぞれの話を聞いていたコーラルは、横になったままで二人の顔を交互に見た後に、ゆっくりと呟いた。

「ニヤ？まあ確かにネコとライオンですから似てはいますけど」

「うん、そう言う事じゃないけどね、まあいいか。さてそれじゃ、一段落ついた事だし、そろそろ出発しようか」

起き上がったからコーラルが皆に声をかける。それぞれに休んでいたメンバーも、立ち上がったたり身体をほぐすための簡単な運動を行うなど、先に進むための準備を始めた。コーラルの隣に座っていたロックも、調整をしていた粒子波動刀を組み立て直すと、ベルトのホルスターに入れて片づけをしてから勢いよく立ちあがった。全員の準備が出来た事を確認してから、コーラルを先頭に遺跡の更に奥を指して一行は歩き出した。

元々の遺跡の特徴なのか、例によってこの通路もガーディアンがいなかったので一行は難なく先に進む事が出来た。通路の角になっている部分を曲がると、その先には今までの扉とは違う、少し豪華な装飾のされた扉が道を塞いでいた。

「ふむ。普通と違う扉って事は、遺跡の最深部はここって事でいいのかな」

「そう、だと思えますよ」

「ハッキリしないなあ。でもまあ試練とかもつたいぶつた物ってのは、大体受ける人は中の事とかは聞かされないものだから、こんなもんかしら」

そう、一人で文句を言ってから一人で勝手に納得しているリカルを放っておいて、ロックもコーラルに質問をする。

「よく分からないと言う事は、この先の試練の内容も知らない訳ですよ」

「そう。ごめんなさい役に立てなくて」

「いや、オレはそんな事でいちいちケチつけるような事はしませんが、気にしないでください。しかし、初めの試練も次の試練もやった事はゴリ押しバトル。せめて最後ぐらいは戦い以外の物で試しを出してもらいたいなあ。流石にちょっと疲れて来たぜ」

この遺跡に入ってから事を思い出し、ロックを少し疲れ気味に呟く。その二人の言葉を聞き流しながら、コーラルは扉の隣にしている機械に手を触れる。機械がコーラルの生体情報を読み取りコンピュータにあるデータと一致した事を確認すると扉が小さく震え、次の瞬間その口を大きく開いた。

開いたその入り口に、コーラル達を先頭にして一行は扉の中に入っていた。部屋の中には様々な道具が透明なケースに収められて陳列されており、さながら展示室のようになっていた。

「あれ、試練の部屋かと思ったけど、ここってオレらの目的地じゃね？」

「本当、どうなってんの。でもまあとりあえず、プレートでも探そうかしら」

部屋の中に入るとロックとリカルは目的のプレートを探して陳列棚を物色してまわった。早足で部屋の中を駆けていく事数分、突然ロックが大声でリカルを呼んだ。

「あつたこれだ。リカルこっち、こっち来てくれ」

ロックに呼ばれたりリカルが、彼の立っているケースの前にやってくると、二人でケースの中を確認した。そこにあつたのは、手のひら大で珍しい模様が彫られた長方形の透明なプレートだった。

ロックは自分のジャケットの中に手を入れると、中に入っていたものを手に掴んで取り出す。その手に握られていたものは彼が大事

に持っていたプレートであり、模様に違いはあるがまさしく二人が探していたプレートだった。目的の物を見つけ出し、二人とも互いの顔を見合わせると満面の笑みで喜んだ。

「探し物、ありましたか」

二人とは別の所から聞こえてくるコーラルの声に、あつたと二人で同時に返事をする、ロックは続けてコーラルに話しかけた。

「これ、約束通りもらっていつでもいいですね」

「ええどうぞ」

許可を得た二人は早速ケースに手をかけて外そうとする。しかしケースは土台にしっかりとくっついていて、持ち上げる事が出来なかった。ロックは土台を調べてみたが、土台にはケースを止めておくような仕掛けは施されてはいなかった。リカルがケースを指で軽く弾いてみると、見た目の作りとは裏腹にとてつもない硬度を持っており、単に力で壊そうとしてもまるで歯が立たない事がわかった。

「ダメだ、上も下もグルツと見てみたけど、どこにも仕掛けらしいものが見つかからねえ」

「うーん、これも扉みたいに特定の人にしか開ける事が出来ないのかしら」

「いちいち全部にそんな仕掛けしてられないと思うけど、コーラルさんに頼んで試してみつか」

どうしてもケースを開ける事が出来ない二人は、ケースを見て回っているコーラルを呼ぶとケースを開けてもらえるように頼んだ。

しかし彼がケースに手をかけても何の反応も示さず、持ち上げようと力を入れてもケースはびくともしなかった。

「あらら、コーラルさんでも開けれませんか。これじゃ完全にお手上げね、どうしよう」

「うん。ところで兄さんが探しに来たものはここにあるの」

「それがどこを探しても無いんだ。ここには無いのかな」

「若、どうやらそのようらしいですよ」

悩むように話し合っていたロック達の会話に割って入るようにジ

ヤナンがコーラルに声をかけてきたので、三人は彼の方に身体を向けた。

「ジャナン、ミリー、何か分かりましたか」

「入り口と反対側の方に別の扉がありました。まだ奥があるようです」

「扉には何か言葉が刻まれていて封印もかかっています。言葉の内容までは読めないのですが……」

彼らの報告を聞いたコーラル達は、陳列品の間を歩いて見つけられた扉にたどり着いた。一見すると壁と見間違えるほど簡素なつくりの扉には、封印を表す紋章が押されており、その紋章の下には古代文字による文章が書かれていた。三人は扉の前に立つとその扉を調べ始めた。

「確かにこれは封印を意味するマークね。この言葉は何の言葉だっけ」

「これは古代のトラメイ語だな。海に住んでいた人達の公用語に使われていた言葉だ。えつとなになに、資格を」

「『資格を求めし選ばれし者、閉ざされし扉を目覚めさせ、最後の試練に望め』」

「あら、コーラルさん読めたの」

「この古文、読み方とか家で教わってきたから。まさかこんな所で使うものとは思わなかったけど」

「自分達のご先祖が使っていた言葉ですから、残っていたのでしようね。それより扉、早くあけましょう」

ロックに促されて、コーラルは封印の紋章に手を乗せると、小さく言葉を呟いた。言葉を注がれた紋章は、淡く輝き次の瞬間強く光り出し、その光が消えると目の前の扉はその姿を一行の前から消えていた。

コーラルを先頭に封印の解かれた部屋の中に入ると、消えていた扉が現れ来た道を塞いでしまう。それに身構える一行に、どこからか重い声が聞こえてきた。

「ここは、この遺跡の機能制御を行うユーザーを登録する部屋。登録を求めるものはどこに？」

「私です。私に、守護者としての資格を」

部屋に響く声に、コーラルは一步前に出て答える。部屋に響くコーラルの声を残して部屋に静寂が訪れたが、それもすぐに新しい声の響きによつてかき消されていった。

「照合完了。ユーザー登録を行う資格を持つものと確認。それでは規約にのっとり実戦テストを行う」

「実戦！何故そのような事をしなくてはならないのですか」

「この施設はその重要性から自己の身を守る者にしか登録を認めていない。これを止める事が出来た時に登録を行う」

声が消えると同時に部屋全体に振動が走り、壁の一部が大きく開き始める。壁が開ききると、中から一体のガーディアンが現れた。

そのガーディアンは、十メートルを少し超えた巨大な力二の姿をモチーフにしたもので、背中に担いでいる二門の大きな大砲と脚の代わりにつけられたキャタピラが、まるで戦車をイメージさせる。

「すごいのが出てきたわね。ちょっとしたパペット並みの大きさじゃない」

「全く冗談じゃねえよこの大きさは。こんなのと戦ってちょっときついぜ」

ロック達五人は、戦車の様なガーディアンを見上げると思い思いに感想を呟いた。ハサミ状の腕をガシャガシャと動かしながら、頭の上に飛び出た緑色の両目でこちらを見ていたガーディアンの目の色が深紅に変わったかと思うと、キャタピラを高速回転させ、ロック達に向かって突撃してきた。

「来たよみんな！」

「ニヤンだよ結局バトるんかい。もう少しゲストの都合も考えてほしいもんだぜ。とりあえずこれで」

巨体を揺らして突進してくる力二型ガーディアンを、左右に飛んで避ける一行。その時ロックは飛びざまに粒子波動刀の発振機を掴

むとキヤタピラにギリギリの所に着地、刀身を閃かせるとすれ違わずにキヤタピラを斬り裂いた。片側のキヤタピラを壊されたカニは体のバランスを崩してスピンスうになっただが、間一髪のところまで体勢を立て直すと、残ったキヤタピラを上手く使って体の向きを変えようとしていた。しかしロツクの攻撃もそれで終わりではなかった。

キヤタピラを斬ったロツクは踏み切り足を軸にカニの方に身体の向きを変えると、刀を構えながらカニに向かって走り込んでいった。そして彼が身体の向きを変えた時、残っていたキヤタピラの脇を走り抜けたロツクは勢いをつけて小さく跳ねると、全身を使って刀を振り、反対側のキヤタピラも先程と同じように横一文字に切り裂き、一旦カニと距離を取るためそのまま走っていった。

「よっし、ガーディアンも足が無くなりやただのカニってね。コーラル兄さん、後任せます」

「うん、分かった。さあ、倒させてもらおうよ？」

ロツクのアシストを受け、カニに攻撃を仕掛けようとした時、コーラルはカニが何かをしているのに気がついた。突き出た目を小刻みに震わせると目の間から泡を吹き出し、それを空中に飛ばし始めた。頭上に浮かぶ泡を見つめているコーラル達。ロツクもみんなから離れた場所でその光景を見ていた。泡の数が空中に増えることにロツクはシッポが落ち着かなくなってきた事に気付き、嫌な予感を感じていた。間近で泡を見ようとロツクが少し近づいた時、ロツクの近くに流れてきていた泡が弾けた。

弾けた泡の飛沫が地面に着くと、それはジュウジュウという音と薄い煙を上げながら何か焦げるようなニオイを出しながら蒸発していった。それを見たロツクは驚いた顔のまますばやく後ろに下がると、上を見て泡の位置を確認してから、泡の発生源であるカニから離れていった。走りながらリカルやコーラルのいた方を見ると、彼らも異変を感じてカニから離れていく所が見えた。

充分に離れてからロツクはカニの方を振り向くと、カニが吐き出

した泡が次々と割れていく所が目に入ってきた。割れた泡の滴が地面に降り注ぐと、部屋中に焼けつくような音と焦げたニオイが充満し、立ち上る煙でカニの姿がかすんでしまった。

「まさか酸を使ってくるとはな。リカル、兄さん達は無事か」

「アタシの心配はなしかよ。とりあえず全員無事よ、あのカニはどうだかわからないけど」

「まあ、酸性度は高くないみたいですからあのガーディアンには耐えられるのでしょうか。しかしあぶなかったですね、もう少し気付くのが遅れていたらどうなっていたか」

「何はともあれ助かった……、若、煙が晴れてきました。……ん？なんだありゃ」

立ち上る煙が晴れてきた時ジャンが見た物は、煙の中で何かがうごめいている姿だった。煙が完全に消えた時一行の目の前にいたのは、カニガーディアンそっくりの小型のカニ型ガーディアンが地面いっぱいひしめていた。大型のカニには小型のガーディアンを産み出す能力がついていたらしく、酸の雨を降らせてロック達を自分達から遠ざけた隙にたくさんの小型ガーディアンを作り出していた。小型のカニが緑色の目を光らせながらガシャガシャと動いていたが、不意に目の色を赤く光らせたかと思うと一斉にコーラル達の方を見て、早足で襲いかかってきた。コーラルの前に立つジャンとミリー、その前にリカルが立つと彼女は拳闘のスタイルで構えた。

しかし、小型のカニがリカルに飛びかかろうとした時、横から飛んできた別の子ガニがリカルに向かってきていたカニにぶつかり吹き飛ばしていった。いきなり飛んできたカニを見て驚いたコーラルがカニの飛んできた方向を見ると、Sボードに乗ったロックが横から子ガニを蹴散らしながらその群れの中に飛び込んでいく姿が見えた。

コーラル達とは別の位置でカニを見ていたロックは、カニが煙の中で何かをしているのを見たため、空中の泡が全て無くなって地面

に降り注いだのを確認してからSボードに乗ってカニに急接近した。そしてカニが、小型の分身を産み出していた事を知ると、粒子刀の発振機を両手で持ちそれを思いきり引き延ばした。すると片手で収まる長さだった発振機は倍以上の長さになった。それを両手で持つと、ロツクは発振機のスイッチを押して粒子刀を起動させた。現れた刀身は二本の剣をそれぞれのツバで固定させた様な、前と後ろにそれぞれ刀身がついた形となった。これがロツクの粒子波動刀一番の特徴である双剣一刃型で、スピードを生かして斬り込んでいくロツクの戦闘スタイルを最大限に生かせる刀だった。

子ガニ達の真横から突っ込むと、ロツクは粒子刀でカニ達を次々と斬り伏せていく。カニを相手にしながら仲間達の方を見ると何匹かの集団がそちらの方に向かっていたので、彼は手近にいた子ガニを一匹掴み取ると、ボードを使って数回その場で回転してから集団めがけて投げつけ、そのまますぐにボードから降りると足を使って器用に拾い上げ、背中ケースカバーにボードを戻すと更に子ガニの群れの中に飛び込んでいった。

ロツクの投げつけた子ガニがコーラル達を狙っていた子ガニの集団を吹き飛ばしていったが、それでも何匹かは巻き込まれる事も無く襲いかかってきた。しかし前衛に立っていたリカルは元から目の前の急な事態に動じてはいなかった。彼女は上から下からやってくる子ガニ達を拳や脚で一匹ずつ確実に倒していった。リカルが子ガニの集団を押さえている間に、コーラル達はその間をぬけてロツクが入り込んでいるカニの群れの中に入っていた。

一方群れの中に飛び込んだ事で子ガニ達の目を自分に向ける事に成功したロツクは、八方全てをカニに囲まれた状態で戦っていた。粒子刀をふるっては目の前のカニを一刀両断にしていき、腰の後ろに粒子刀を持ち大きく回転しては周囲のカニを巻き込みながら攻撃、更に後ろから襲いかかってきたカニには後ろ側の刀身を突き刺して撃破する等、一人で多数を相手にしているにも関わらず冷静な対応で戦っており、その力の片鱗を表していた。

「ロック」

自分に掛けられた声を聞いて、とがったネコ耳をピクリと動かすと、ロックは周りの子ガニを片づけてから身体をひねって声のした方向に振り向いた。その方向からはコーラル達の子ガニを乗り越えながらこちらに向かってくるのが見えた。自分と彼らの間にたむろしている力ニ達を斬り伏せると、ロックはコーラル達と合流した。

「ロック、大丈夫ですか」

「一匹自体は大したことないしこの位なら何とでも出来る。子ガニはこっちで食い止めておきますから、兄さん達は大ガニを早く倒して」

そう言つとロックは粒子刀を身体の後ろで真横に構えると、全身を使って大きく横に振りかぶると片方の刀身のエネルギーを大ガニめがけて解き放った。飛んでいった刀身は子ガニを粉々に吹き飛ばしていくと一本の細い道を作り出した。早くと促すロックの声に頷くと、コーラル達はロックが作り出した道を走って大ガニのもとへと進んでいった。

コーラル達を送り出したロックは、失った粒子刀の刀身をもう一度生み出し右手に構え、左腕に装備しているAPRの安全装置を外すとコーラル達が走つていった方向に銃口を向ける。そして自分を襲ってくる子ガニ達を粒子刀で追い払いながら、コーラル達三人に飛びかかるうとしていた子ガニをAPRで一匹ずつ正確に倒していった。

背後から数匹の力ニがロックめがけてやってきた。すぐに振り向いたロックが粒子刀を振るおうとしたその時、横から飛んできた水晶のつぶてが力ニに突き刺さった。突然横からの攻撃を受けた力ニはなす術もなくその機能を停止させると、そのまま地面に落下していった。水晶の飛んできた方向から、力ニの頭を踏みつけながらリカルがやってくると、彼女はそのままロックと合流した。

「ハイロック、元気」

「元気って、どう見えるよ」

「楽しそうに見える」

リカルにそう言われると、ロツクは否定をする事無く彼女に背を向けると、カニ達に向かって構え直した。

「所でどうしてロツクがこっちにいるの？」

「どうしてって、誰かがチビガニを引きつけておかないと、デカイのと戦っている時に挟み撃ちにされるだろ」

リカルの質問に対してロツクは簡単に答える。しかし彼女はその答えに対して更に質問を続けてくる。

「そうじゃなくて、ロツクがあの人についていけばよかったでしょ」

「それはダメ。コーラルさんの試練だから、締めの方はきつちりとおの人にやってもらう」

「またそれ？無理して出来ない事をさせて、大げなんかさせたりしたらどうするの。もう少し手伝ってあげてもいいじゃない」

飛びかかってきたり足元を走ってくる子ガニ達を、魔道銃と空弾銃の二丁拳銃で倒しながら、リカルは背後のロツクに意見を言うが、彼は一言大丈夫とだけ言うと言と粒子刀で子ガニを更に斬っていった。

「なんだかんだでここの一番には何とかしてくれる人だからね。絶対クリアしてくれるぞ」

7th ACTION 『助けるのが恩返しだ』

ロツクの作った道に沿って、コーラル達三人は親玉である大ガニガーディアンのもとへと走っていく。途中で襲いかかってくる子ガニは、途中までロツクの援護を受けながらそれぞれが分担しながら倒れていき、細い道がカニでもう一度埋まらないうちに脱出しようと必死になっていた。

そうしてやっと子ガニの群れを抜け切ったが、大ガニを近くで見ることが出来る距離まで来ると、今度は大ガニから洗礼を受けるた。腕を突き出しハサミを大きく開くと、ハサミの付け根に装備されている機銃で狙いをつけて三人に向かって撃ちだした。

固まって行動していた三人はそれぞれに別れると銃弾を避けながら大ガニに対して攻撃態勢をとる。カニもそれを黙って見てはおらず、壊れたキャタピラの代わりに身体をゆすりながら腕を動かすと三人を追尾しながら機銃を掃射し続ける。しかし足回りを壊されたしまった事で上手く動く事の出来ないカニは、身体が小さくて小回りのきくコーラル達にとっては対して脅威となる様な相手ではなかった。

「よし二人とも、このまま死角にまわりこんで一斉に攻撃をするよ」

「了解です。しかしどんな奴にしても、動く事が出来なきゃデクの坊だな。やーい、悔しかったら動いてみな」

動く事の出来ないカニにジャンンは大きな声で野次を飛ばす。するとその言葉を聞いていたかのようにカニはその目をぎよろりとジャンンに向けると、その巨体を数回ぶるぶるとふるわせた。するとカニの脇腹の辺りからニョキニョキと足が生えてきた。脇腹の左右から四本ずつ、計八本の足が生えてくると、カニはその足をしっかりと地面に下ろして自分の身体を持ち上げ歩き出した。

「……マジで？」

「ジャンナのバカ。余計な事言うから変な事になっちゃったじゃない」

「な、そんな事俺に言うなよ、そこまで知らねえやい」
ミリーにバカにされてジャンナはついムキになって反論したが、それもカニによって中断させられてしまった。自由に動ける様になった事で体の向きを変える事が出来る様になったカニは、ジャンナに狙いを定めるとハサミを振り下ろして彼を攻撃した。

ハサミの一撃を後ろに飛んで避けるジャンナ。コーラルとミリーはカニがジャンナに気を取られている内にカニの体に攻撃を与える。しかし攻撃を受ければカニも黙ってはおらず、ちょこまかと動き回ってはハサミを振り回し機銃を撃ちまくりで三人を寄せ付けない様にしていた。

「くっ、動けるようになる途端に手ごわくなってきましたね」
「うざいったら冗談じゃねえ。これでどうだ」

ジャンナは腰にくくりつけていた手榴弾を引きぬくと、掛け声と共にカニに向かって放り投げる。投げた手榴弾はジャンナの狙い通りカニの目の前で爆発、いきなり目の前で衝撃を受けたカニは混乱を起こしてふらつく。更に二個ほど手榴弾を投げ込むと、カニの装甲に傷が生じた。カニの動きが止まった所を狙って三人は襲いかかると、カニを囲んで攻撃を開始した。

シヨックで機能を一時停止させていたカニが目覚めると、自分が色々な方向から攻撃を受けているのを知った。攻撃してきている人間を追い払うために先程生み出した小型機を呼び寄せようとしたが、小型機達は人間の仲間達の手によって次々と破壊されていく。何とかしなければならぬ。そう考えるとカニはコンピュータを駆使して現状を確認、最適な戦闘方法を探し始めた。

「向こうの方はもう終わりそうね」
「だから言ったる、大丈夫だって」

「こっちももう終るわね。片付いたらどうするの」
「あっちに加勢する事も無いだろ。遠巻きに見させてもらっわ」

そう言いながらロツクは足元に寄ってくる子ガ二を粒子刀で突きさしながらコーラル達の様子を見ていた。リカルはその事ですこし不満があったようだが、終わりそうな戦いにわざわざ飛び込むのもお節介に思ったので特に何も言わなかった。しかし二人が目を離して別の子ガ二達を相手にしている時、コーラル達が戦っている方向から大きな声が聞こえたかと思うと、事態は一転していた。

コーラル達に襲われたカニは思考を完了させると早速行動を開始した。身体を低く構えてから両腕を地面に勢いよく叩きつけるとその巨体を空高く弾き飛ばした。あつとコーラルが大きな声を出したが、そのとき既にカニは大きく跳ねてコーラル達から離れていき、ロツク達の頭上を越えていった。

先程までいた大ガニが急に消えたため辺りを探していた二人は、上を見上げると巨体が宙を飛んでいる光景を、半ば感嘆の思いで眺めていた。カニが天井すれすれの辺りを飛んで行くのをその場で見ていたロツク達は、カニが何かをばらまいているのを目にすると、次の瞬間それに苦勞する羽目になった。カニは新しい子ガ二を産み出すと空中から地面に向かってまき始めた。生まれた子ガ二達は次々に地面に落ちていくと、先程生み出された子ガ二と戦っていたロツク達の頭上に降ってきた。

「いたたた、またカニかよ」

「わわわっ、ちよちよつとアブな、もうカニはいいわよ」

降ってきた子ガ二を避けようと右往左往としている二人をしり目にカニは地面に着地すると、すぐに向きを変えて五人の方を向く。子ガ二達に襲われた二人は自分達にまわりつく子ガ二を振りほどくと、そのまま背中合わせになって子ガ二達と戦い始めた。カニに逃げられたコーラル達はそれを追いかけるために、危険を承知で新たに生み出された子ガ二の群れの中を突っ切っていく。しかし大ガ二の行動もそれで終わりではなく、腕を地面について身体を低く構えると背中に構えていた二門の大砲を向けていた。

「ロツク、リンさん、危ない」

一番最初にカニの行動に気付いたのはロツク達に駆けよっていたコーラルだった。その声に子ガニ達と戦っていたリカルがコーラルの指をさす方を見ると、大ガニが構えていた大砲から二人めがけて弾を発射したのはほぼ同時の出来事だった。

「ロツク！」

悲鳴交じりのリカルの声が聞こえたかと思うと、ロツクは彼女の前に飛び出した。その直後、飛んできた弾はロツクに直撃した。

「ああっ、遅かった！」

「坊主たち、大丈夫か」

ロツク達の立っていた所は、大量の土けむりが巻き上がり彼らの姿を隠していた。あれほどの大型の大砲の直撃を受けた二人の安否を心配する三人。その時ただ巻き上がっていただけの煙に流れが出たかと思うと、土けむりは一瞬のうちにふきとばされ、その中からはロツクとリカルの二人の姿が現れた。

ロツクの粒子波動刀は刀身を作り出す以外に、そのエネルギーを丸型に張り巡らせる事で盾を作り出すこともできる。あの時リカルの前に飛び出たロツクは剣を盾に変えると、その盾でカニの攻撃を受け止める事で直撃を防いでいた。

「リカル、無事か」

「う、うん、何とか。ロツクは大丈夫？」

「ああ。身体が動くなら手を貸してくれ」

カニからの攻撃を切り抜けたロツクは、盾をしまうとすぐに左腕のAPRを構えるとカニに狙いを定め、長距離の狙撃用に設定したプラズマ弾を背中の大砲の砲口に向けて正確に撃ち出す。後ろにいたりカルも魔道銃を構えると、ロツクの横から飛び出して彼が狙った大砲と反対の大砲めがけて水晶の魔法を発動、そのまま水晶を撃ちこんだ。

二発目を撃ち込むために大砲を構えていたカニは、それを避ける事も出来ずにまともに攻撃を受けた。砲口に飛び込んだ二種類の弾丸は大砲の弾丸を貫き、砕かれた弾丸が爆発を引き起こし大砲の砲

身とカニの背中の上部分が吹き飛んだ。背中から炎と煙を吹き出しながらよろけるカニを見ながら、コーラルはロツクの隣にやっけるとそのまま彼の横を駆け抜けようとしていった。

「兄さん達、最後のプレゼントだ。受け取れ」

APRのエネルギーを最大まで高めたロツクは、コーラルに叫ぶとAPRを正面に構えた。

「ターゲットロツク、APRレーザー、シュート！」

吠えると同時にトリガーを引くと、ロツクの左腕から極太のレーザーが発射された。APRに溜めたエネルギーを一度に全て撃ち出した攻撃は、射線軸上にいる子ガニ達を消し飛ばしながら大ガニめがけて真っ直ぐに飛んでいく。そして大ガニに届こうとしたまさにその時、突然カニの前に壁の様なものが現れレーザーを受け止めた。大ガニは攻撃を受ける直前、自分の近くにいた子ガニを集めてスクラムを組ませると壁を作りだし、その壁でロツクが放ったレーザーを止めたのだった。壁に使われた子ガニ達は全て残骸になってしまったが大ガニにダメージは無く、更に大ガニは補充とばかりに新しい子ガニを産み出していた。

カニの行動を見たコーラル達は一瞬躊躇したが、それでもロツクが作ってくれた一瞬のチャンスが無駄にしないためにも彼らは再び走り出した。その時子ガニを出し終えた大ガニの目がきらりと光ると、大ガニと子ガニが連携してコーラル達に襲いかかって来た。

「コーラル兄さん！くそ、アジな真似をしてくれんじゃん」

「まだ戦えたなんて。ロツク、後ろ！」

「なっ、うぐえっ」

リカルの声にロツクは後ろを振り返ると、子ガニのハサミがロツクめがけて飛んできた。とっさに身を翻したが避けきることが出来なかったロツクは、ハサミの一撃を背中を受けてしまった。幸いな事に装備していた金属繊維製のハーフジャケットとSボードのおかげで大きな傷にはならなかったが、背中に受けた衝撃のため、たたらを踏んでよろけてしまった。何とか体勢を立て直した事で倒れる

事は無かったが、彼が振り向くとそこにはたくさんの子ガ二達がハサミを動かしながら、真つ赤な目を更に赤くしながら二人のまわりを取り囲んでいた。

背中合わせに密着するロツクとりカル。その二人めがけ、先程とは打って変わった勢いで襲いかかる子ガ二達。飛びかかってくる子ガ二達を二人は拳術で追い払うが、数の多さに次第に押されていく。十数匹のカニが一斉に飛びかかってきた時、ロツクは背中に収めていたロツドに手をかけると魔力をロツドに込め、頭の中にイメージした魔法を発動させた。

「集い疾れ雷描の爪、サンダーストーム」

ロツクの声と共に解き放たれた魔力は何本もの稲妻になって彼らの周囲に降り注ぎ、二人を襲おうとした子ガ二達を一掃。更にすぐ次の呪文を詠唱し始めると、別の魔法を発動させた。

「風の刃の盾。レイザータービュランス」

ドレイブスベル
起動呪文を叫ぶと同時にロツク達のまわりに生み出された乱気流の魔法は、飛びかかってくるカニや地面にいるカニが飛ばしてくるハサミをはじき飛ばしていった。はじかれた彼らの体やハサミには無数の鋭い切り傷がついており、この気流の威力を物語っていた。

乱気流の境界を張ったロツクは次の手を考えていた。しかし子ガニはそんなロツクに付き合おうとする気は無いらしく、ロツクを攻撃できないと知ると見張りに二十匹ほどを残し、残りは全て大ガニと戦っているコーラル達を目指して進んでいった。それを見たロツクは何とか彼らの注意をこちらに引きつけようとしたが、下手をすれば返り討ちを受けるこの状況下では思うように身動きが取れなかった。

「このままじゃコーラルさん達が。何とかしねえと、一体どうしたらいいんだ」

「だからアンタが最初にあのカニを斬っておけばよかったのよ。それを頑固にあの人に任せるって、一体何が有るのよ。あの人とアンタに何かあるっての」

「あの人はオレ達の村の恩人だ」

遠まわしにロツクのせいでこうなった事を大声で叫ぶリカルに、ロツクも負けじと大声で返す。そのあまりに突然の事にリカルは気が削がれ、目を開いて彼の方を見た。

「あの人は、本当は強い素質もある。シヤチなんだからオレより戦えて当たり前だ。でも生来から気が優しくて争う事を嫌っていたからそういう部分を見られがちで、あの人の本質を知っている人が少ない。オレ達の村が大変な時になった時、色んなところから援助を受けたが、あの人は個人的にもオレ達を援助してくれた。その時の恩があるから、それを返すための機会を探していた。あの人が困っているなら、それを助けるのが恩返しだ」

不利な状況になっていて自分を奮い立たせようと、ロツクは声にいつも以上の力を入れて話をしていった。そんな彼の後ろ姿をリカルはじつと見ていた。その表情は見えなかったが、慌てたように良く動くネコ耳とシッポを見て、自分が見てきた彼の中で多分一番苦い顔をしているであろうという事は容易に想像できた。リカルは軽く息を吐き出すと、目の前でゆっくりと周りを見渡している少年の背中に声をかけた。

「どうも勘違いしてたわね。ロツク、アンタは良いオトコね」

「あ、ニヤんだよこんな時に急に」

リカルの言葉を聞き、ロツクは振り返る事はしなかったが疑問詞たっぷりの台詞で彼女にたずね返した。

「アタシの師匠が言ってた事があってね。こんな世界で、人から受けた恩を忘れずに返そうとする奴は良いオトコなんだって。あの人たちの支援にはアタシが行くから、合図をしたらこの魔法を解除して」

話をしながらリカルは、左腕につけていた腕輪に自分の手をのせる。

「セットアップ、アーマー！」

腕輪の擬態解除呪文を唱えると、彼女の左腕できらりと冷たい輝

きを放っていた腕輪は突然まばゆい光を放ち始めた。光は彼女の腕を伝うとそのまま彼女の全身を包んでいき、彼女が一つの光の塊になった次の瞬間、その光は内側から、まるでガラスが砕けて飛び散ったかのように彼女から離れていった。

光の中から現れたりカルは、ジャケット姿から一変、身体にC Aをまとっていた。それは全身を包む特殊金属製で、水の波を表した白と水色の肩当てに背中には推進用の4門のバーニア、右腕には彼女のSスティックがついており、左腕には小さいながらも威力に優れた電磁砲を装備している。砲身内部を電磁石化させ弾丸の速度を上昇させる事によって威力を高めるこの武器は、リカルのカスタムによって魔法を撃ち出す事も出来るようになっていた。

「ロック、準備出来たよ。魔法を解いて」

「リカル、お前……」

「言ったでしょまかせてって。良いオンナの条件は、良いオトコに尽くすことだって師匠も言っていたしね」

そう言って明るく笑うと、ロックは軽くウインクを飛ばした。頼むと一言短く答えると、ロックは風の結界を解いた。結界が無くなった瞬間、周りに待機していた子ガニ達が一斉に二人に攻撃してきた。二人はそろって一点を突破すると、ロックは振り返って子ガニ達を蹴散らしていき、リカルは背中中のバーニアを吹かせると大ガニめがけて突撃、子ガニに行く手を遮られている三人の上を飛びこしてカニにスティックの強烈な一撃を見舞ってやった。

着地したりカルは三人の道を阻むカニを倒して道を作ると三人と合流。そのまま四人で大ガニを攻撃し始め、ロックは子ガニの群れの外側から手持ちの武器を駆使して大ガニと子ガニ達を攻撃していた。子ガニの数を減らしながら大ガニを削っていくロック、それぞれの武器で大ガニを追いたてるコーラル達三人、電磁砲で大ガニに撃ちこみながら四人に襲いかかってくる子ガニを追い払うリカルと、それぞれ自分の状況で役割を決めながら戦っていた。

しかしいくら手傷を負わせているとはいえ個の戦力と数の戦力、

そのどちらも不利な彼らは次第に押されていった。

「きやつ」

「ミリー、無事か」

疲れのために集中力が途切れ、レーザーブレードの一撃を避けられたミリーは、背後から数匹の子ガニによる攻撃を受けてしまった。致命傷には至らなかったがアーマーの継ぎ目に受けた攻撃は彼女の身体にそれなりの深さの傷を作り、満足に動くには難しい状態にしてしまった。

傷を受けた彼女の側にジャンがつくとカニ達に警戒を取り、リカルは大ガニの気を引くために魔法や電磁砲で集中して攻撃を行う。しかし後ろからやってきた子ガニを倒すために身体の向きを変えた時、大ガニがそのハサミを大きく振りかざし、彼女めがけて横にハサミをふるった。子ガニを倒したりカルがそれに気付いた時、防御する事も出来ずに横からその攻撃を受けてしまい、彼女の身体は低く宙を飛んで子ガニの群れの近くに落っこちた。

「リカル、みんな！」

一人遠距離から戦闘に参加していたロツクは、仲間が攻撃を受けた光景を見て叫んだ。大ガニに倒されたりカルの側に子ガニ達が寄ってきたが、寸前の所でコーラルが彼女を助けに入り、カニ達を倒していく。しかしそのため二人ずつ二組に離れる事になってしまい、さらに彼らを子ガニが取り囲む事によってそれぞれ孤立する結果となってしまうた。

すぐに助けに行きたいロツクではあるが、先程の攻撃でSボードは機能を停止させてしまい背中の痛みもまだ上手く取れていないため動きが鈍い。この状態で自分が入っても助ける事が出来ないと判断したロツクは、自分の考えが甘かったことも同時に認識していた。いざとなればコーラルの前に飛び出して彼を守ろうとしていたが、現実はそれすらままならない状況となっており、黙って見ているしか無い自分の技量の低さにやきもきしていた。

(せめて飛び込んでいけるだけの力があれば)

効果が薄いと知りつつもAPRと魔法で仲間を助けるために大ガ
二とその周囲を攻撃しながらロツクは思案を巡らせる。だかどれを
とつても効果が表れる様なものではないとすると彼は一層焦り出し
た。囲まれたみんなに攻撃が始まる。倒れていた二人も何とか立ち
上がったようだがそれでもあまり変わらない。

（畜生、こんな時に何も出来ないなんて）

何もできない自分のふがいなさがだんだんと自分に対する怒りに
変わっていく。その自分の目の前に子ガニが飛びついてきた時、彼
は鋭くロツドを振ってカニを地面に叩きつけると同時に叫んでいた。

「何が冒険者だ。オレのバカヤロー！！」

その瞬間、まるでロツクの声に呼応するかのようには、彼が首から
下げていた小さな水晶のペンダントが光ったかと思うと、その光が
彼の身体を包みこんでしまった。全身を包み込んだ光がひときわ強
く輝いたかと思うとその光はたくさん粒となつて弾けとび、そし
て光から現れたロツクの姿は先程のリカルの様に、CAを身に付け
ていた。

まばゆい光の中から、CAを身に付けてロツクは現れた。彼の装着しているアーマーは、白を基調に濃淡の違う青紫色のラインが入った物で、背中には翼の様な二基一對のユニットが付いており、ユニットにはそれぞれ三枚ずつ、それぞれが様々な方向に可動する羽根型のスラスタを装備している。専用の武器はついていない、スマートなデザインのアーマーである。

見た事のない物を手に入れた事にロツク自身が軽く混乱をしていたが、アーマーを装備した事で自分の身体が楽になつた事に気がつく。ロツクは粒子波動刀を構えてカニの群れの中に飛び込んでいった。走ろうとした時、身体に浮遊感を感じたかと思うと次の瞬間、いきなり滑るように身体が急前進していった。足の裏とスラスタハイテクルライドスライダ羽根、他の各所に装備されていたP・R・Sシステム（粒子搭乗式滑走機構）が粒子を反応させて身体を浮かせると、反応させた粒子を推進力としてロツクの身体を押し出した。

「わああ。ちよちよちよまつ、にゃあー」

初めて装着したアーマーを扱いきれないロツクは、自分の意志とは裏腹に猛スピードでカニの群れの中に突撃していく。手にした刀を振るう間もなく突っ込んだロツクは、ボウリングのピンの様に子ガニ達を次々と吹き飛ばしていく。ガンガンと派手な金属音を立てながら吹っ飛んでいく子ガニは周りにいる別の子ガニを巻き込んでいき、彼の通って行った後は一本の広い道が出来上がる。何とかして止まろうと体をあちこちひねり、最後に止まれと声を出した時、拍子抜けするほどあっさりと止まったためロツクは着地に失敗、前のめりにすっこけていった。

「ロ、ロツク。大丈夫かい」

「だい、じょーぶ」

コーラルの目の前で停止したロツクは、彼に一言答えるとその場

で跳ね上がるように起きた。足の裏のユニットの効果で身体は浮いたまま、相変わらずロックは足のおぼつかない浮遊感を感じていたが、なぜかロックは先程よりも自然に振る舞える感じがした。

その時ふとある事に気がついたロックは、自分の考えが合っているかを確かめようとした。左腕に意識を集中すると、自分が元から装備していたAPRを思い浮かべる。すると彼のアーマーの左腕の一部が変化して、ロックのAPRと融合した様な砲口が腕の上部に現れた。自分の考えた通りにアーマーが可動する事を知ると、ロックは今までの出来事を理解する事が出来た。

装着者の思考を受け取って行動のサポートを行うイメージ・ダイレクトサポート・システム。それがロックのアーマーに搭載されている機能だった。ロックが現場に駆け付けようとした時にギミックが発動して、暴走するように前進してしまったのはこのシステムのためだった。

アーマーについていくらか分かると、ロックはすぐいつもの調子に戻った。元々SボードなどのRUの扱いを得意としているので、多少操縦の規格が違っていてもRU。使い方を知った事で彼は自分の得意な戦い方を行える事に、先程までの落ち込んだ気分を全て拭い去っていた。

左腕のAPRを構えると機銃モードに設定してから、自分達とジヤナン達の間にあたむろっている子ガニ達に向かって撃ち出した。発射された弾丸は、いつも使用している威力設定以上の破壊力を持っており、高速で撃ちだされる弾丸は子ガニの群れを文字通り粉碎していった。

「わ、すごい攻撃力」

「何だコレ、出力の増幅でもしてるんか。これじゃまるで機関砲だな」

子ガニを粉碎したAPRの威力にコーラルとロックはそれぞれ感じた事を声に出す。そして間を隔てていた子ガニがいなくなった事で、ジヤナンとミリィもロック達と合流する事が出来た。

「二人とも、大丈夫でしたか」

「若、どうも申し訳ございませんでした。若をお守りする役目を受けながらこの始末、誠にもって……」

「ジャンナ、話が長い。……っ、若、後ろ」

ミリーの声に全員が振り向くと、背後から大ガニがハサミを振り上げ全員を叩きつぶそうと構えていた。その動きに反応していた口ツクとリカルは、それぞれ左腕を構えると、同時に大ガニのハサミと腕のつけ根を狙って攻撃した。大ガニ本体に比べて比較的強度の弱い関節を集中的に狙われたためその部分が破損、ハサミが大ガニの身体から離れて大きな音と共に床に落ちた。

A P Rで攻撃をしながらロツドを取りだしたロツクは、右手にそれを持つとそのまま早口で始動呪文を紡いでいき、カニのハサミを落としたのとほぼ同時に呪文を完成させるとロツドを高く掲げ、魔力増幅のパワーワードと起動呪文を唱えた。

「真なる力の解放を。P・U P（ポテンシャルアップ）」

ロツドの先から薄い膜の様なものが出てきてロツク達を包み込むと、全員身体に軽い電流が走った様なピリツとするものを感じ、それが収まった時身体そこから力がわき上がってくるのを感じていた。

「全員の傷の治療や回復はオレの力じゃ時間がかかるから、代わりに身体能力を向上させといた。これで一気に決めてください」

全員の能力を引き上げたロツクは大きく飛び跳ねるとコーラル達の頭上を飛び越えて先頭に着地、粒子波動刀の発振機から刃を発生させるとそのままP R Sで加速して大ガニの下に駆けていき、すれ違いざまに一閃。カニのボディに斜めの深い切り傷をつけるとそのまま後ろにいる子ガニを倒しに群れの中に飛び込んでいった。

ジャンナとミリーは後ろの子ガニを抑えるために壁となり、コーラルとリカルは同時に大ガニに攻撃を始めた。蓄積されてきた疲れとダメージで全員の動きのキレが悪かったが、ロツクのかけた魔法の効果で疲労の感覚はほとんど感じず、身体の動きもいつも以上に

軽く、まるで身体に羽根が生えた様な気分を感じた。長引く事でまたカニに形勢を変えられる事を考えてか、リカルはコーラルと共に積極的に大ガニを攻め込み、ロツクも子ガニを倒しながらもAPRで援護の攻撃を行った。

ロツクが斬りつけた側面に回り込んだリカルは、むき出しになった内部電装系めがけて電磁砲の弾を叩きこむ。身体の内側を抉り取られ、カニはその身を身悶えさせる。それに合わせてコーラルが反撃のスキを与えない様に杖でカニを打ちすえる。カニは両腕をぶんと大きく振り回しながら酸性の泡を目の間から吹き出し、必死の抵抗を見せていた。コーラルはカニから一度離れ、リカルはカニの頭を越えるほどに高くジャンプをすると電磁砲を構え、目の間の泡の吹き出し口を狙って引き金を引く。ところが電磁砲から弾丸射出用の電気が発生しただけで肝心の弾が出てこない。先程からの戦闘で砲弾を全て使い切っていた。

「うわ、しまったー弾切れだ。ロツク、何とかならない」

「ふざけた事言っただけじゃねえよ全く、少し離れてろ」

インカムでリカルからのSOS通信を受けたロツクは、あきれた声と怒鳴り声の混じった返事をしながらも彼女をその場から遠ざけると、自分の周りにいる子ガニを粒子刀で切り刻むとロツドを手にする。そして力を頭にイメージしながらロツドを大きく頭上に構え、勢いをつけて一気に振り下ろした。

「落ちろ、サンダークラッシュ・ボム」

ロツクの放った魔法の雷は、呪文を一部省いて発動させたため先程より威力は弱かったが、カニの泡の吹き出し口を破壊して傷ついたカニにダメージを与えるには充分だった。大ダメージのため動きのぎこちなくなっただカニを視線に捉えながら、リカルは機能を変更させた電磁砲を構えながら始動呪文を唱える。砲口に魔力が集まり魔法が完成すると、カニをターゲットにしたまま砲口を下に向けた。

「水晶の最強魔法、味わってみな。クリスタル・フォルテシモ」

彼女が発動させた魔法の光は大ガニめがけて一直線に床の上を走

つていく。その魔法が大ガ二に届いたその瞬間、圧縮されていた魔法が解放され水晶の杭がカ二を突き貫いた。更に杭が砕けた時、その魔力がカ二を包んで、水晶の柱の中にカ二の巨体を閉じ込めてしまった。

「よっしゃ、コーラル兄さん、最後キメちゃって下さい」

「さんざん苦労したんだから、これで終わりにしちゃってよ」

ロックとリカルの二人の言葉に押され、杖を構えたコーラルはスケートで床を大きく蹴ると大ガ二めがけて走り出した。オーラの力を十分に込められ青い輝きを放っている杖を頭上に振り上げると大きく飛び跳ね、クリスタルに包まれた大ガ二の目と目の間の部分めがけて思いきり振りかざした。

杖に打ちつけられたクリスタルはその場所からひびが入っていき、それはどんどんと拡がっていく。そしてクリスタル全体にひびが入ると、クリスタルはその身の中に閉じ込めていた大ガ二と一緒に粉々に砕け散った。砕けたカ二とクリスタルが空中に舞い、ロック達のライトの光に当てられキラキラと星くずの様に部屋の中で輝いていた。

大ガ二を倒すと残っていた子ガ二達は動きを止めたが、再び動き出したかと思うと列を作りだし、そしてそのまま何列かに別れると列をなして部屋から出ていった。その光景を全員が何とも言えない不思議な物を見る様な目で見ていた。

「実践テスト終了。登録希望者の実力判定完了。資格を受けるに値すると判断、希望者にユーザー登録を行う。希望者は両手を上に上げる様に」

子ガ二達が全て部屋から出ていった瞬間、初めに聞こえた声があった。聞こえてきた。コーラルは声に従い両手を開いてそのまま頭上に手を持っていく。するとどこからか青白い色のレーザー光線が、コーラルの両手に向かって照射された。レーザーがコーラルの両手をなぞっていくのを、彼とのお供の二人は固唾を飲みながら見守り、ロックは珍しい物を見れた事に喜びの表情を浮かべてそれに見入り、

こっちの方に元々興味の無かったリカルは一人周囲に異常が無いかを見回っていた。コーラルの手を隅々まで走った後、何の前触れもなくレーザーが消える。終わった事を確認したコーラルはゆっくりと両手を下ろすと自分の手をまじまじと見つめた。

「ユーザー登録完了、施設の使用を許可する。本施設は重要物品の保管庫となっている。今後は品物の保管、引き出しをユーザーが自由に行える」

声が終わると同時に、入ってきた扉が開かれる。その瞬間全員が試練の終了を感じ、皆から一様な安堵感が発せられた。リカルがロックに歩み寄ると、彼も彼女に気付いて振り向き、それぞれ互いに手を頭の上にかざすとそのまま相手の手のひらにハイタッチをした。

「大変だったけど、何はともあれプレートが手に入るわね」

「ああ、オレも個人的に恩を返せたし良い終わり方だな。それにしても……」

試練を達成したコーラルに祝いの言葉をかける二人とそれを受けて謙遜しているコーラル達三人を見ながら呟いたロックの言葉に、どうしたのとリカルが問いただしてくる。ロックは両手を頭の後ろで組んで背筋を伸ばすと、目元を少しつり上げた。

「結局オレ達、とつつぁんに良い様に使われたわけだからな。そこがどうしても面白くねえや」

そう言うってからロックは、喜びムードの漂う三人の所に向かってそのままの体勢で歩き出した。リカルが彼の後ろ姿を見ると、ゆっくりとだが大きくシッポが振られており、彼がチャンジャに対して今感じている感情を表していた。

「ま、わかるけどね」

そう一言呟いてから、リカルも出口に向かって歩き出す。途中ですれ違う四人に早くプレートを手にしようと思いをかけると、彼女は一番に扉をくぐる。それを見た残りの四人も急いでその扉をくぐっていった。

展示室に戻ってきた五人はプレートに収められているケースの前に再びやってきた。ロック達はコーラルに先程したのと同じようにケースを持ち上げてもらう。するとケースが一瞬淡く光ったかと思うと、コーラルは何をやっても持ち上がらなかったケースをいとも簡単に持ち上げる事が出来た。リカルはケースの中のプレートに手を伸ばすとむんずと掴み取る。その隣でコーラルは、試練を達成させた証としての品物を持ち帰るため、隣のケースを開けていた。

それぞれ目的の物を手にして、五人は遺跡を後にする。入り口の空洞の長い階段を上って行って外に出ると、出発する時高い位置に上っていた太陽は今、水平線と口付けをかわしていた。もういくらかもしてしまえば完全に海の彼方に太陽が沈んでしまうほどの時間を、彼らは遺跡の中で過ごしていた事になる。

遺跡から帰って来た彼らをまず迎えたのはチャンジャだった。偶然出てきた所に居合わせた態度では無かったので、彼らが出てくるのをずっと待っていたようだった。どうだったかと首尾を聞いてきたチャンジャに、リカルとコーラルは同時に腕を突きだすとその手を開いて、自分達が持ち帰って来た物を見せる。それを見たチャンジャは一つ大きく頷くと、コーラルについてくるよう伝え、ロックとリカルには自分の家で待っている様に言ってからコーラルを連れて歩き出した。

置いてきばりにされた二人はとりあえずチャンジャの家に歩いていき、中に入っていた。シャワーを借りようと家の奥に入っていたロックは風呂場のドアノブに手をかけると、同時にリカルの手もそのドアノブにかかった。

「……………何、お前もかよ」

「うん」

「……………どっちが先よ」

「こういう時に譲ってくれると男の株が上がるわよ。それとも一緒に入る？」

「そ、んな訳いかねえだろ。……上がったら声かけるよ」

リカルに一言言い残すと、ロックは一人足早に家の外に出ていった。疲れて頭がぼやけていたため、一瞬そうすると言いそうになつた言葉を慌てて飲み込んで、半ば逃げるように外に出たため不自然な態度になつてしまい、それがリカルに違和感を与えたが、彼女も特にそれを追求しようとしなかつたのでそのまま浴室に入つていった。

家の外に出たロックは、踏切をつけて飛び跳ね家の屋根の上に飛び乗ると、そのまま屋根に腰をおろし、取りだしたキセルにハーブを詰めると携帯していた種火で火を点けハーブを吸い出した。一階建ての屋根の上は大して高いというわけでもないが、この島の家はほとんど全て一階建てで、さらに島には盛り上がった部分も無いため、この屋根の上からでも十分景色を楽しむことは出来た。

ぱたん、ぱたんとしツポの先端を小さく動かし屋根を叩きながら特に何かを考えるわけでもなく、ポーっとしながら水平線を見つめハーブを吸っていると、ふと視線を感じたのでその方向を見てみると、島の子供が数人、下からロックの事を見上げていた。キセルを口から離すと、ロックは子供達に笑顔を見せると小さく手を振る。すると子供達も笑顔になつて大きく手を振つて応える。子供の一人が行こうと言うと、口々にロックにさようならと言つてどこかに走つていく。

子供たちの走り去つていく方を見ながら、ロックは自分が面倒を見ていた村の子供たちの事を考えていた。みんな元気で暮らしているか、自分がいなくなつても平和だろうか。色々な事を考えて、最後に頭を数回振つて考えるのを止めた。村を出てまだ数日しか経っていないし、自分で村を出たのだから今更心配してもしようがない事で、しかしそれでも自分が守つてきたものだからどうしても気になつてしまう。全くどうしようも無いなと思いつながら、ロックは八

「ブの煙を一息、強く吸い込んだ。」

「ロック。次いいわよ」

下から聞こえたりカルの声で立ち上がると、携帯灰皿にハーブの吸い殻を捨て、ロックは屋根の上から地面に直接飛びおり家の中に入ってしまった。ロックが家に入つてすぐにチャンジャが帰つて来た。彼を出迎えたのは、風呂上がりの髪をブラシで梳かしているリカルだった。彼女は下に着ていたインナースーツとスパッツだけで居間の座布団に座っており、ジャケットとホットパンツは自分の後ろに畳んで置いていた。

「あ、お帰りなさい。遠慮なく使わせてもらっていますよ」

「おうよ悪かったな。ん、ロックはどうした」

ロックの居場所をチャンジャに聞かれると、リカルは部屋の奥を親指で指さした。そちらの方から聞こえてきた水の音を聞いて納得したチャンジャは部屋の隅の戸棚からラム酒とソーダ水、二本のボトルとグラスを三つ持ってくる、リカルと向かい合うように座布団の上に座った。彼はグラスの中にラム酒を注ぐとそれをソーダ水で薄く割り、そのまま自分で中身に口を付け、リカルにもグラスとボトルを差し出す。

「ま、とにかくお目当ての物が手に入つて良かったな。こつちも失敗続きで駄々をこねてた孫をやつと一人前に出来たし、まあおいら達そろつて万々歳つてところだなあ」

「なーにが万々歳よ。最初からアタシ達を利用しようとしていたくせに」

差し出されたボトルを手にして、ソーダ水に少しだけラム酒を混ぜた薄いソーダ割りをグラスの中に作ると、リカルは一気に中身を飲みほした。喉に潤いを与えると、彼女は目の前の老人を睨むように見つめて、幾分声のトーンを変えて話を始めた。

「何だよ急に。おいら何かしたかな」

「プレートを入れていたケースは、試練を攻略して資格を受けた人間にしか開けられない様になっていた。つまりあなたの孫が証を

手に入れられない以上アタシらは目的を達成する事が出来なかった。初めに見た時は分からなかったけど、先に試験を済ませた時、試験官らしいアナウンスがケースを開けるにはこれが必要みたいな事を言っていたから間違いないでしょ」

リカルの言葉を聞きながら、チャンジヤは黙ってグラスを傾け、グラスの中身を口の中に流していく。リカルはソーダ水だけを空になったグラスに入れ直すと、一口含んで話を続けた。

「失敗続きのお孫さんを合格させる方法を考えた時にアタシらが来て、話を聞いた時に利用しようと考えたんでしょ。でもそれだったら一言ぐらい相談してくれてもいいと思うんだけどな。ロツクも怒っていたわよ、おじいさんにいい様に利用されたって」

「それがなんでもいい。こっちは奴より倍以上生きてるんだ、そうそうガキにこっちの考えの斜め上に行かれてたまるかよってんだ。大体奴は人に頼まれて遺跡に潜る様なガキじゃねえから、奴が自分から入るように仕向けて手伝わせるにやこの方法しかねえんだい」

「なるほどね、ロツクが良い顔しない訳がわかったわ。悪いおじいさんね」

詫びれる事無くいけしゃあしゃあと言いかけたチャンジヤをあきれた表情で見ながらリカルはグラスの中身のソーダ水をちびちびと飲みだした。それを聞いたチャンジヤは苦笑いをしながら、懐の中から何かを取り出してリカルの前にそつと差し出した。

「悪党みたいに言うなよ、人間きの悪い。そう思うからこそ、おいらからもお前さん達に謝礼の品を持ってきたのに」

「お礼の品物？まあもらえるならありがたく頂くけど、つまらないものじゃないでしょうね」

「実は何にするか迷ってたな。だからとりあえず誰でも喜ぶような物にしようってんでそれにした」

少し意味を含めた言い回しに首をかしげながら、リカルは彼から貰った封筒の中身を確認した。中には深い青色をした円形のプレートが五、六枚入っていた。これはこの世界の通貨であり、プレート

の色と大きさを価値が変わる。このプレート一枚で、普通の暮らしをしてる人が一月は何もしないで食べていける位の価値を持っていた。さすがのリカルもこのプレートはめったにお目にかからない代物で、目を少し見開くとすぐに視線をチャンジャの方に戻した。

「驚いた。確かに誰でも喜ぶだろうけど、まさか現金をそのままくれるなんてね、しかもこんなに。これって相場の金額以上じゃない」

「まあ色々世話になったからな、それも含めて少し多めに入れたいわ」

「そう言うなら貰っておくけど、それにしたって多いわね」

「そりゃ、いろんな分がその金の中に混ぜられているからな。例えば口止め料とか、例えば謝罪の気持ちとか」

突然聞こえてきた声に二人が振り向くと、そこにはロツクが意地の悪い笑顔で腕組みをしながら立っていた。風呂上がりの彼は、下はいつものジーンズをはいているが、上の方はタオルを首から掛けているだけで全く服を着ていない状態だった。

「全く相変わらず食えねえとつつあんだぜ。子供に難しい使いを吹っかけるんだから」

「は、使いの出来ねえガキって年でもなし、ちったあ年寄りに協力しろってんだよ」

「そうよロツク。こうしてお小遣いも貰ったんだから文句言わないの」

「にしても何て格好してんだあ、年頃の嬢ちゃんがいるってのに上真裸マッパで出てくるなんてよ」

「言いたい放題言いやがって、まあいいや。それよりつつあん、ちよつと悪いけど背中を見てくれねえか」

「背中、どうかしたんか？」

「シャワー浴びてたら、水に血が混ざってきてさ。自分で見える所に傷は無いから後は後ろの方かと思つて」

言いながらロツクは腰を下ろすと、ロツクはチャンジャに背中を

向けた。チャンジヤはロツクの後ろに来ると、手で彼の身体を覆っているやや短めの体毛をよけながら地肌を念入りに見てみた。

「背中の怪我って、さつきガーディアンの攻撃を受けた所？傷負ったままあれだけ戦えたの」

「直接の原因はその攻撃だろうけど、怪我の方は違うな。おそろく……」

「あ、ここだな。古傷が開いて血が少し出てるな。少しだから大した事無いだろうけど、一応医者を呼んできてやらあ、ちいっとそのまま待っている。あ、後お前は酒飲むなよ、血い止まりにくくなるからな」

ロツクの背中をポンと軽くはたくとチャンジヤはゆったりとした動作で立ち上がり、そのまま外に向かつて歩いていった。ロツクはタオルを一枚広げると背中からそれを羽織り、そんな二人のやり取りを見ていたりカルは身体をロツクの方に向き直すと、グラスに口を付けながら彼の身体を見ていた。

「ゴメンな、見苦しいもの見せる様な事して」

「別に見苦しいってほどの物じゃないから気にしないし、それに格好がラフなのはお互い様じゃない」

「そう言ってもらえりやありがたいね。しかしそのインナーって随分変わったアジャスターなんだな、ジャケットのせいで気付かなかったぜ」

彼女のインナーアーマーは、胸元に胸の辺りまで開くフラスナーが付いているが、身体の脇や胴周り、肩の近くや腕の内側など様々な部分に色々な長さのフラスナーが付いている。この各部分のフラスナーを締める事で、装着者はアーマーのサイズとフィットを自分で調節する作りとなっていた。今のリカルは全ての部分のフラスナーをほぼ全開に開いており、開かれている部分からは彼女のくすんだ金色をした体毛が、その姿を覗かせていた。

「ちょっと変な目で見ないでよ、ロツクったらこんなのが好きなの？意外とエツチなんだから」

両腕で身体の前を隠しながら、からかう様な笑顔でロツクに話すリカル。彼は一瞬キョトンとするが、その言葉にみるみる顔を赤らめていく。

「馬鹿野郎、気になっただけで下心なんざ一つも持ってねえよ。て言うかお前だって人の裸じろじろと見てるじゃん。何、そんなに珍しいか」

「まあ、珍しいと言われれば珍しいわね。全身にいろんな種類の傷がある身体だなんて」

先程までの笑顔から表情を少し引き締めると、リカルは改めてロツクの身体に視線を移してから彼の言葉に答える。ロツクはその言葉聞いて納得したのか軽く頷き、そして羽織っていたタオルをゆつくりと脱ぎ捨てた。

ロツクの顔には右の頬に、刀による大きな切り傷の痕がついているが、顔から下の身体の方には体毛越しにもハッキリと見える深い傷が、少なくとも十以上はついていた。その傷の種類もリカルが言うように様々な物であり、刃物による切り傷からひっかき傷、青アザになっている打撃痕や鋭い牙にかみつかれた痕、更には銃創といった具合になっており、それらの傷もかなり古いものからごく最近出来た物まで、およそ普通の生き方をしている人間の身体つきでは無かった。

「ガキの頃から冒険者になるって言うては、いろんな人に稽古付けてもらっていたし、ダンジョンとかにも潜っていたし、村の守人バンディットしていた時に村を襲ってきた盗賊と戦った時のヤツもあるからな」
自分の傷を得意げにというわけでもなく、ロツクは淡々とそれから全部をひっくりくるめた感じでリカルに話して聞かせた。彼女も神妙な面持ちでその話を聞きながら、ロツクの身体を改めてみていた。が、不意にリカルがロツクに少し近づくと、表情を変える事無く彼に問いかけてきた。

「ねえロツク、少し触ってみてもいいかな」

彼女の言葉にロツクは少し戸惑いを見せたが、特に意識する事で

も無いので彼はリカルにいいぞと答えると、彼女は彼の後ろに回り込み背中への傷跡を指でゆつくりとなぞり始めた。少しくすぐったさを感じていたが、我慢できないほどの物では無かったのでロツクは黙ってリカルに背中を預けていた。

「やっぱり凄いわね、小さなものから大きくなって深いものまで色々。アタシも結構場数を踏んで来たしいろんなハンターを見て来たけど、アンタほどのを見た事はちょっとないわ」

「自分でもそう思う。でも生きてりゃケガ位するし、傷つかないで生きていくことも出来ない。傷つかない人生なんてものはどこにも無いから、傷や痛みつてのは生きている証だよな」

リカルの言葉に相変わらず、淡々とした調子で返しながら、ロツクは空いているグラスにボトルの中のソーダ水を入れると、出ていたお茶を混ぜて飲み始めた。そして彼の背中に手を置いていたりカールは、少し思いつめた様な表情をした後、ロツクの背中に自分の顔をうずめた。突然背中に重さを感じたロツクが振り向くと、目の前に彼女の金色の髪が飛び込んできた。背中に顔を密着され、ロツクも流石にこれには驚いたのか、うわっと、思わず声を上げていた。

「ちよつと、どうしたんだよいきなり。そんなにくつつかれちゃ恥ずかしいよ」

「あ、ゴメン。何て言うかさ、男の人の背中だなんて思ったたら、ついね」

なんだそりゃ、と尋ねてくるロツクの言葉を聞いて、リカルは背中に埋めていた顔を上げると、正面からロツクの目をじっと見つめて、彼の背中をなでながら口を開いた。

「こんなに傷つきながら、誰かのため、自分のために前に進み続けて、そしてまた傷ついていく。男らしい生き方だと思うけど」

「買いかぶりすぎだよ。大半はしょうが無くやってた事の結果だし、古傷にしたって治す前に新しい傷がつくもんだからしつかり治すのが面倒になっただけ。第一、誰かにその事を誇らしげに話す様な趣味は持ってねえからな」

ここまで話すとロツクは前に向き直り、床に置いてあるグラスを持つと残っている中身を飲みだした。

「身体の傷にしる心の傷にしる、誰にだって言いたくない事の一つや二つはあるだろ。オレは好き好んでそんな話を聞く気はないし、人に話す気にもなれない。リカルにだってあるだろ、人に言いたくない傷跡が」

傷の話題を振られた時、リカルは急にロツクから離れるとそのままその場に座り込んだ。彼女が自分から離れた事を知ったロツクも、身体の向きを変えて彼女の方に向き直る。彼女は足を崩したまま座っており、こわばった表情をしたまま左手で自分の首筋をさすっていた。彼女の首には、少女の身体にはあまりつり合わないデザインをした革製のチョーカーが巻かれており、ロツクも一度そのチョーカーについてリカルに言ってみたが、彼女はあまり表情を変えずに好きでしてるから気にしないでと言っていたのを思い出した。

彼女の態度からあまり話して良い話題じゃ無かった事を悟ったロツクだが、聞き手だった彼がいきなり別の話題を出すのも難しくどうしようかと考えて、とりあえず考えがまとまると、ロツクはリカルの頭に手の平を優しくポンと置いた。

「ま、あれば偉いつてわけじゃねえし、そんなに気にするものじゃないよ。オレも数が多いもんだから、どれがどの分だったかなんてもつきちんと覚えてねえからな」

そう言ってから、八八八とロツクは声を出して笑いだした。笑いながらリカルを見ると、彼女はまだ何かを引つ掛かっている様な顔をしていたが、頭に乗っているロツクの手を取ると、彼の顔を見て小さく微笑み、それを見たロツクと一緒に二人で笑いだした。

「なんつーか、おめえら二人ホントに仲が良いよな。見てるこっちが恥ずかしくなりそうだわ」

「……いやだから誤解ですから、つて、ああもうどうでもいいや。頼みますからそんなに見ないでくれますか？」

二人が笑っていた所に入って来たチャンジャの、あきれた様な第

一声を聞いたロツクはそれに異議を唱えようとしたが、隣のリカルの、ガラが悪いと思われるほどに思いきりつり上がった目と強く振られているシツポを見て、機嫌を損ねるのも得ではないと思った彼は、半ばやけになって話を打ち切った。そしてロツクは、チャンジヤが連れてきた医者にケガの治療を受け、リカルはロツクの代わりにチャンジヤと話を初め、ロツクの治療が終わったのは太陽が完全に水平線に沈んだ頃だった。

エピローグ シャチの旅立ち

モビス島にある二つの小さな島の片方には、この島の人間が信仰している海の神様を奉っている神殿がある。普段は訪れる人もまばらだが、冠婚葬祭など祭事のイベントには人が集まる。今ここには海の守護者としての試練を乗り越えたコーラルが、神殿の中で海の神の祝福を受ける儀式を行っていた。チャンジャを初め島の有力者や偉い人が一緒に神殿の中に入っており、その間に神殿の外の広場では祝いの宴会の準備に島中の人間が忙しく動いている。そしてその人達に混ざって手伝いをしているロックとリカルの姿も見えた。部外者とはいえ、島中が騒がしい中で自分達だけ何もしていないのも居心地が悪いので、彼らは自分達から手伝いを買って出た。

ロックは照明用のライトやかかり火の台の設置を手伝い、リカルは村の女性達と一緒に宴会に出す料理を作り、そうこうと手伝いをしている内に太陽はすっかりと沈んでしまい、ロック達が設置していた照明器具に次々と灯りがともっていった。

空が完全に暗くなり、星が瞬き始めたころ、神殿の方が騒がしくなってきた。儀式を終えたコーラルが、チャンジャ達と共に神殿から出てきた所だった。神殿から出てきたコーラルに島の人間が集まってくる、彼はそれに答えて身振り手振りで話をしていく。最後に神殿の神官が出てきた所で、コーラルの試練達成を祝しての宴会が開かれた。ロックは部外者を装って出るのを遠慮していたが、リカルの方はノリノリで宴会に飛び込んでいき、チャンジャを初めコーラルの家族達が総出で誘って来たので、断りきれないと思ったロックは宴会に参加することにした。

コーラルの家族は重すぎる肩の荷がやっと降りた事に安堵したのか陽気に楽しんでおり、彼自身も口ではどうでもいい様な事を言っていたが、試練をやり遂げた事をとて喜び、宴の料理や酒に積極的に手を付けては自分の友達に遺跡での話を語っていた。そして

リカルはロツクの隣に座ると、楽しく騒いでいる彼らを見ながらその雰囲気を楽しんでいた。彼女の隣のロツクは、カップルなんだから隣に座れば良いじゃんというチャンジャの良く言えば粋な計らい、悪く言えば悪乗り全開のいたずら心で座らされたため初めはぎこちない態度だったが、今はリラックスした様子でテーブルに出ている料理を堪能していた。

「んー、おいしいー。ロツク、ちゃんと食べてるの？アタシこんなにおいしい海の料理食べた事無いわよ」

「見りゃわかるだろ、魚は好物なんだから、言われなくたってちゃんと食ってるよ。それよりリカルは食いすぎじゃねえのか。さつきからずつと食ってばかりな気がするんだけど」

「だって美味しいんだもん。お刺身は新鮮だし、焼き魚も揚げ魚も味付けが最高、いろんな魚介類と一緒に煮込んだ浜鍋も贅沢な味がするし、それにこの魚のワタの塩辛、お酒が欲しくなるいい味だわ」

「お前さ、もうちょっと落ち着いて食べよ、はしたないなあ。あ、オレにもその塩辛よこせよ」

たくさん食べているリカルに軽く冷ややかな視線を送るロツクだったが、彼も大皿三枚に山と料理をのせては一人で黙々と食べ、山の高さを着実に低くさせていってるので彼女の事を悪く言う筋合いは無かった。こうしてこの二人は、今日の祭りの主役とはまた違った意味で島の人達から歓声を受けていた。こうして皆が楽しく騒ぎ夜もすつかりふけ、宴に参加していた島民たちがそれぞれ帰宅についていく頃、ロツク達も今日はお開きと会場から離れていった。

「うー、食った食った、もう食べねえよオレ」

「あー、仕事は上手くいったし料理はおいしかったし、もう気分最高。こんなハイなの久しぶり」

「バーカ、冒険を仕事なんて言うなよ。でもホントにいい気分だにゃあ」

ピンと空に向けて立てているシッポの先端を、ゆっくりくねらせ

る様に揺らしながら、ネコ科の二人の少年少女は月に照らされた夜道をゆつくりと、満足げに歩いていく。その後ろからは、先程の宴会の主役だったシャチ族の青年が自分の祖父を伴って、自分達の先を歩いている今日一緒に冒険をした少年達を見ていた。

「全く。さつきまで一緒に大変な事をしていたのに、あの二人はもう笑ってる。元気でいいな」

「ネコ族特有のマイペースなだけにも見えるけどな。ま、おいらも若いころはあんな感じだったけどな」

「何となくわかりますよ、おじいさんは今も元気ですから」
そう言って微笑むコーラルを見て、チャンジヤもガハハと小さく笑いながら破顔する。ゆつくりとした足取りで前の二人についていくように歩く二人。少し歩いてから、今度はチャンジヤの方から声を掛けてきた。

「さつきも話をしておいたが、これでお前も次の海の守護者の候補の一人になった。長い慣例のせいで村長と守護者は同一人物が兼任するようになった。元々そんな決まり事もねえから守護者になったからって村長まですることあねえ。それに順当にいきやお前の出番はまだ先だから、お前はまだ自分の好きにしていればいいさ」

「そうですか、それでしたらおじいさん。……私は今回の事で自分の力量や考えの足りなさを知りました。だから私は自分を見つめ直すために、修行を兼ねて旅に出たいのです」

孫の言葉を聞いたチャンジヤは、内心で小さな驚きをもちながら表情には出すことなく旅ねとただ一言だけ呟いた。幼いころから小心者で、自分の意見はしっかりと持つてはいるが周りに流されてそれを伝える事が出来ない子。そのため守護者の家系の者として以前に、海という特殊な世界で生きては行けないかもしれない。そう考えていた彼は、孫が幼いころから海で生きる種族としての心構えを教えるつもりで色々と鍛えてきていた。

しかし今の孫を動かしたのは、自分よりも年下の少年達が、しっ

かりとした目的を持って困難な事に向かつていった姿を間近に見てきた、その経験そのものだった。島の外から来た者がそれを教えた、例えそれが知り合いだとしても老人には複雑な心境だった。しかし、初めて孫が話した前向きな言葉を聞いた時、チャンジャは次に話す言葉をすでに決めていた。

「そんな偉ぶった事言うからにや、モノになつたらちゃんとう島に戻ってくるんだらうな」

顔をこちらに向けて真剣な眼差しで問いかけるチャンジャ。その祖父の言葉を聞いた時、コーラルも真剣な眼差しで祖父の目を見返し、力強く一言はいと答えた。孫が初めて見せた表情。それをみたチャンジャは急に顔をほころばせた。そして突然の事に戸惑うコーラルに構う事無く彼は口を開いた。

「そこまで腹決めてんなら止める理由もねえな。おいらはお前が立派になつて帰ってくるのを待つとするか」

「ありがとうございます。それでは善は急げ、早速旅支度をしてきます」

旅立ちの許可が下りた事に感謝の意を示すと、コーラルは弾けるように家に向かつて走つていった。チャンジャはその背中を見送つた後、今度は自分達が住み家している宇宙船に帰つていく少年達を見て、その口元を妖しく歪めた。歪んだ口の端からは鋭い牙が見え、月明かりを受けてきらりと星の様に瞬いた。

「せっかくだから、もう少しお使いを頼むとするかね」

誰に聞かせるでも無い声を出してから、チャンジャはみんなとは別の方向に歩いていった。

翌朝、目的を果たしたロック達は次のプレートを探すためにモビス島を立つ準備をしようとしていた。艦内の大まかな整備を済ませた後、食糧などの物資を買いに行くため船外に出た二人は、そこでチャンジャに出会った。

「にや、とつつあん。わざわざ見送りに来てくれたんか」

「まあそれもあるが、今日は折り入って頼みてえことがあつてな」
「頼み事？まさかまた何かとんでもない事させようつてんじやないでしょうね」

改まつた態度のチャンジャを見た二人は訳が分からず不思議そうに顔を見合わせる。その二人を見ながらコホンと一つ咳払いをする
とチャンジャは自分の用件を話し出した。

「実はコーラルの奴が武者修行の旅に出たいつて言いだしてな」

「へえ、兄さんが旅にね、それはまた思い切った事しようとして
いるな。で、それがどうかしたの」

「旅に出る事を島の連中に知らせたら、奴と仲のいい友達の何人
かが一緒についていって言い出してきやがった」

「随分人気があるのね。まあ、人気があるのはいいことだと思っ
けど」

「しかしあての無え旅に大人数でぞろぞろ動くつても都合が悪
い。そこでここからが本題なんだけどよ、孫達をおめえらの船に乗
せてやつちやくれねえか？」

「船に乗せてくれて、それはつまりオレらの旅につき合わせる
つて事ですか？ちよつと無理が出ると思っけど」

「随分図々しい頼み事してくるわね。本人がいない所を見るとお
じいちゃんの独断ね。いくら何でも孫バカがすぎない？」

チャンジャの突然の申し出に、二人はそれぞれ思つた事を彼に伝
える。しかしそれらの言葉を全然気にしていないチャンジャは、つ
れない事を言うなよと言いなから身体を低く構えると二人に近づい
てきて、彼らの目の前で自分の考えてきた必殺の文句を囁いてきた。
「コーラルが旅に出たいつて言いだしたのは、お前さん達と行動
して自分の未熟さを知ったから、つまりお前さん達二人が事の発端
なんだよ。だからこの位の頼みは聞いてくれよ」

そこまで言うつとチャンジャは自分より二回り以上年下の二人に向
かつて深々と頭を下げる。低い姿勢ながら随分無茶苦茶な事を言っ
ている老人を見ながら二人の若者は渋い表情をしながら溜息をつい

た。

「とつつあん、とりあえず頭上げてくれないか」

しばらくの沈黙の後、最初にそれを破ったのはロックだった。二人に頭を下げていたチャンジャはその言葉を聞くとゆっくり姿勢を元に戻した。

「オレは別にかまわないぜ。知らない仲でも無いし、来る者は拒まずだ。本人にその気があるなら面倒みるよ」

「人手不足の貧乏旅だから、船の中で働いてもらう事になるけど、それでもいいなら預かるぐらいはしてあげるわよ」

「え？お前さん達本当にそれでも構わないんかい」

二人の答えを聞いた時、チャンジャは少し目を丸くしたかと思うと思わず聞き返していた。

「別に断る理由が無いからな。それより自分で言ってきたトンチンカンな事聞いてくるなよ」

「そうよ、直接話に来れば普通に請け合っつのに、変な理由付けて断りづらい状況を作ろうとしたんでしょけど、そんなの逆効果よ」
チャンジャに対するリカルの言葉にロックも頷く。自分の行動が裏目に出た事を悟ったチャンジャは、軽く頭を指で搔くと頭を下げて自分の非を認めた。

「確かにおめえらの言うとおりだ、すまんかったな。それで孫の件なんだが……」

「さつきも言いましたけど、アタシらは構いませんから。後はこちの言うとおり働いてくれるのと、自分で乗る意思があれば来させてください」

「そうか、済まねえな。そんじゃ早速、おーい、おめえら。許可はもらったぞー」

二人から了解を得たチャンジャは、後ろを振り向くと待っているであろう人物に合図を送る。少し時間を置いてからその人物、コーラルがこちらに歩いてくるのが見え、その後ろからも人が歩いてくるのが見えた。一人、二人と歩いてくる人影をロック達は黙って見

ていたが、その数も十人を超えると二人の表情も少しこわばった物になってきた。更に彼らの数が増えるとロツク達二人は顔を見合わせて小声でひそひそと話をし始め、そうこうしている内に全員やつて来たコーラルとその友達、ちよつとした一集団並みの人数となっていた。

「あの、とつつあん？ 兄さんについて行きたいって人、一体何人いるんだ」

「大体三十人ぐらいだな。みんな孫の事少なからず気にしている連中ばつかだよ」

「で、この人数をまとめて面倒見ろつてのね」

「そう言う事だ。つうわけで約束通り船に乗せてやってくれや。」

ほれおめえらも挨拶しねえか」

「本当はここまで大きくしなくなかったんだけど、皆引き下がってくれなくて。迷惑かもしれないけど、今後よろしくお願いします」

『よろしくお願いします』

チャンジャに促され、当事者であるコーラルが一步前に歩み出でロツク達に挨拶をする。彼の後ろにいた一団も一糸乱れぬ姿勢で整列を行うと敬礼をしてコーラルに倣つて挨拶をしてきた。

「うわーい、礼儀正しく挨拶してきて、これじゃ断りにくいじゃねえか」

「て言うか、もう乗せるつて言った後だから今更無かつた事にもできないのよねえ」

挨拶をされた方は、またはめられたと言いたげな表情で話を持ちかけてきた老人を睨んだが、当の本人はまるで自分に関係ないと言った感じでその視線を無視してきた。向こうに何を訴えても無駄だと言う事が分かったロツク達は改めて前を向くと、自分達を見ている人達の視線を見ながら覚悟を決めたかのように、しょうが無いかと呟いた。

「各乗組員、最終報告を」

「粒子波動エンジン、エネルギー充填率80パーセント、出力定格値」

「航行用のメイン、サブ両方のバーニア、機動用のスラスタースタビライザー、船体各所のPRSシステム全て正常」

「マッププログラムを初め各航行用プログラムの整理完了、すぐに引き出せる様にしました。並行して行っていたジャイロやレーダーの調整も完了です」

「食糧などの生活物資、および船の資材の積み込み、全て終了しました」

船のブリッジ各所に座っているオペレータ達の報告を聞きながら、副長席に座っているロックは手にしているファイルに一つ一つ確認した項目をチェックしていく。一通りの項目にチェックを付けた後、確認漏れのある項目をロックがオペレータに尋ね、そうして全ての項目を完了させた事を確認したロックは目の前の折り畳みデスクにファイルを置くと、彼は自分の席の左前の操舵コンソールに立っているコーラルに目を向けた。

その後、結局全員に根負けしたロックとリカルは、コーラルとその仲間達を船に乗せる事に同意して彼らを迎え入れた。その際、船の持ち主で今の冒険の主導権を持っているリカルをチームのリーダー、彼女についてきたロックは立場上二番目という事にしてコーラル達に自己紹介をした。二人の自己紹介の後コーラル達からもそれぞれしてもらったが、その中には昨日一緒に遺跡に入ったジャンとミリーの姿もあった。みんなが解散した後話をしてみると、コーラルが心配なのでついてきたとそろっていつてきたので、改めてこの二人が彼の事をどう思っているのかが分かった。

自己紹介が終わった後はそれぞれに仕事を振り分けていって、船内の片付けと出発の準備を同時に行っていく。そうして出発の準備が先に出来たため、まずは船から動かす事にして、現在ブリッジでは出航準備を始めて今に至っていた。

「チーフ、各部署の準備及び船の準備は完了しました。いつでも出航させられます」

コーラルから声を掛けられたロックは、一つ頷くと頭にかぶっているインカムのスイッチを入れると、マイクを引き出して口の前にもってきた。

「それじゃとつつあん、兄さん達は責任もって預かっていくからな」

「おう、鍛えるつもりでせいぜいこき使ってやってくれや」

チャンジャの言葉に苦笑してから、ロックはコーラルに挨拶をするか聞いたが、別れはもうすましてあると言って彼はやんわりと断って来た。そうこうしている内に船は発進準備を全て終わらせ、後発の合図を待つのみとなった。

「よしそれじゃ出発しようか。コーラル兄さん、お願いします」

「ヨーソロー。微速前進、艦主翼、副翼展開。PRSユニット始動」

ロックの合図でコーラルは各部署に指示を出しながら推進機を使って巨大な船体を動かし始めた後、RUの様に粒子の波に船体を乗せる準備を始める。船体各所から空間の粒子を取り込み反応、反応させた粒子を圧縮させると噴射口から吹き出す。そうして空間の粒子の波に船を乗せると船は浮遊を始めた。

「船体浮遊完了。高度安定しました」

「了解。全推進装置、出力上昇。大気圏内巡航速度まで加速開始」
船体が一定の高度にまで上がったのを確認してから、コーラルが合図を送ると各オペレータがそれぞれ目の前のコンソールに指を走らせる。推進用のバーニアに火が入ると船体の速度が上がっていき、船が大空を走りだしたところには、先程までいたモビス島はすでに遠くにかすんで見えるだけになってしまった。

「兄さん御苦労さま」

船の姿勢が安定した事を確認してからロックは席から立ち上がり、そのままコーラルの隣にやってくる。コーラルはそんなロック

を横目で見てから、また視線を正面に戻した。

「後は自動操縦にして、兄さんも少し休んだら」

「ありがとう。でも航海中は何が起きるか分からないから、私はここでいいです。所でオーナーはどうしました？出航前から姿が見えませんでしたけど」

「（真面目な人だな）それが分からないんですよ。サボってんじゃないだろうな。大体あいつは……」

「失礼な事言っでんじゃないわよ」

扉の方から聞こえた少女の声が、ロックとコーラルの話に割って入ると同時にリカルが扉から入って来た。彼女は手にポットと紙コップを持っており、それらを船長席のデスクの上に置くと、ポットの中身をコップに注ぎ始めた。

「ちよつと作りたい物があつたから準備していたのよ。後みんなにこれ配つてたの」

「コーヒーですか」

受け取ったコップの中身を見てコーラルが声を掛けると、新入り記念の振る舞いコーヒーよと言いながら、リカルはブリッジのオペレータ達にコーヒーを配って回った。

「振る舞いって、どうせ新しいブレンド試して量を作りすぎたから配ってるんだろ」

「あ、そう。ロックはいらないのね。じゃ、ロックの分ももらつておこつと」

「そんな事言つてねえつて。みんなに配つてオレには無しなんてヒドくね」

リカルの言葉にふてくされるロックを見て、自分で言った事じゃないのと軽く受け流しながら、リカルは船長席に戻ると席に置いてあつたコップに中身を注いでそれをロックに差し出した。それを受け取ったロックが中身を見ると、明らかに他の人達の持っているコップの中身と違う事に気付いたので、彼は思わずリカルにそれを訊ねていた。

「何これ、オレのだけカフェオレか」

聞かれた彼女は自分を見ているロツクを見ると小さく頷きながら
そうよと声を出し、コップに口を付けて中身を少し飲む。

「苦いの嫌いって言ってたでしょ。だからアントのだけ特別よ」
自分で作ったブレンドの味に満足したのか彼女は少し目を細めると、シッポを小さく揺らして満足さを表現していた。その彼女に背を向け、ロツクはブリッジの窓から外を見ながらカップの中身のカフェオレを飲み始める。

「わざわざ中身を変えろとは、結構オーナーも優しい所がありますね」

「別にそんな事しなくても、ブラックでも飲むつもりだったんだけどな」

ミルクで飲みやすい濃さになったカフェオレを飲みながら、ロツクはコーラルの話に小声で返す。自分では小さな声だと思っていたが隣のコーラルにはしっかり聞こえていたらしく、彼は軽く微笑みながらロツクに更に話を続ける。

「自分の苦手な物なのに飲もうとしたのですか。チーフも優しい所がありますね」

「べ、別に優しさとかそんなんじゃない、そんなんじゃない……」

コーラルの声に反射的に振り向きながらロツクは反論をしようとしたが、視界の端にリカルが見えた時、彼は言葉を濁しながらまた前の方を見だした。そのまま何かをぶつぶつ呟いている彼を見て、心配になったコーラルは大丈夫かいとロツクに声をかける。ようやく正気に戻ったロツクは、少し顔を赤くすると耳を寝かせて、聞かれたわけでも無いのか細い声でコーラルに呟いた。

「惚れた弱みだもん、仕方がねえじゃん」

それを聞いたコーラルは、何となくそういつた事に興味が無さそうにみえる少年をみると、ふっと微笑んで誰にでも無く言葉を出した。

「やっぱり似た物同士だね」

「うっさいぞ、兄さん」

「ん？二人して一体何の話してんのよ」

「いえ、二人とも仲がいいですねって話ですよ」

表情を変えずに、質問をしてきたリカルにコーラルが答えると、その言葉に反応したロツクが言葉にならない声を出しながら彼に飛びかかる。自分より年上の青年に飛びかかったロツクとそれを手であしらうコーラルの二人を見て、まるで兄弟がふざけ合っている様に見えたりカルは、その顔に羨望とも哀しみともとれる不思議な表情を一瞬浮かべたが、すぐに何でも無い様ないつもの笑顔になると、ブリッジの中で一番高い位置にある艦長席に腰をおろして号令を發した。

「よし、次の目的地は交易都市ステップ。そこから宇宙に出るよ」

リカルの声に口々に了解の返事が飛び交うと、船は一路、目的地に定められた都市に向けて進路を取りなおして発進した。

紺碧の空を切り裂く様に、二人の冒険者と彼らについてきた海の住人達に乗せた船は風と共に駆けていく。冒険者達を新たな冒険の地へと誘うために、銀の翼を大きく広げて。

エピソード シャチの旅立ち（後書き）

二話目もやっと完結しました。これを手に取っていただいた方々、ここまで読んでいただきありがとうございます。もしご意見がございましたら感想をお送りください。

次回はよいよ宇宙へ！上がる！一つ手前のお話。どうぞご期待下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5935h/>

F/A フリーダム/アドベンチャー 第二話 ダイビング トウザ アドベン

2010年10月10日02時34分発行